

田原本町文化財 調査年報 2015年度 25



田原本町教育委員会

田原本町文化財 調査年報 2015年度 25



田原本町教育委員会

例　　言

1. 本書は、田原本町教育委員会が2015年度（平成27年度）に実施した文化財事業の概要をまとめたものである。
2. 埋蔵文化財の発掘調査については、土地所有者・施工業者ならびに近隣の皆様にご協力とご理解を賜った。記して感謝します。
3. 本書は、Iを清水琢哉・柴田将幹・西岡成晃、IIを藤田三郎・柴田・西岡・東藤隆浩、IIIを東藤、IV.1を丸山真史（東海大学）・藤田、IV.2を小林和貴・鈴木三男（東北大植物園）・佐々木由香（株式会社パレオ・ラボ）、能城修一（森林総合研究所）が執筆した。I,2の遺物は清水・柴田・江浦至希子・村島由樹・森嶌美穂が実測し、清水・柴田・西岡・江浦がトレスをおこなった。本書は西岡が編集した。

目 次

I. 田原本町の埋蔵文化財

1. 町内における開発	
(1) 町内における開発と発掘調査	1
2. 埋蔵文化財の調査	
(1) 発掘調査の概要	2
1. 唐古・鍵遺跡 第116次調査	4
2. 唐古・鍵遺跡 第117次調査	12
3. 唐古・鍵遺跡 第118次調査	14
4. 保津・宮古遺跡 第42次調査	23
5. 保津・宮古遺跡 第43次調査	28
6. 宮古北遺跡 第19次調査	31
7. 宮古北遺跡 第20次調査	35
8. 寺内町遺跡 第16次調査	40
9. 多地区古墳推定地隣接地の発掘調査	46
10. 三笠遺跡 第1次調査	49
11. 阪手北遺跡 第7次調査	51
12. 唐古・鍵遺跡 試掘調査 (S-201501)	54
(2) 工事立会の概要	55
1. 佐味垣内遺跡 工事立会	58

II. 資料の整理と活用・普及

1. 文化財資料の整理・保管	
(1) 埋蔵文化財の整理・保管	61
(2) 木製品の樹種同定と保存処理	63
(3) 図面・写真的保管と資料撮影、写真的デジタル化	68
(4) 図書の受領	69
2. 遺跡・文化財の保護	
(1) 県指定文化財	69
(2) 町指定文化財	77
3. 講座	79
4. 学校教育等への支援	
(1) 小学校出前授業	80
(2) 中学校職場体験学習	81
(3) 大学の学外授業	81

(4) 講師の派遣	82
5. 刊行物一覧	83
6. 資料の活用	
(1) 資料の貸出	84
(2) 写真掲載・撮影	85
(3) 資料調査	88
7. ボランティア組織	
(1) 唐古・鍵遺跡の保存と活用を支援する会	88
(2) 唐古・鍵遺跡史跡公園ボランティア	88
III. 唐古・鍵考古学ミュージアム	
1. 常設展示	
(1) 田原本ギャラリー 今回の逸品	93
2. 企画展・ミニ展示	
(1) 春季企画展「たわらもと2015発掘速報展」	94
(2) 秋季企画展「弥生遺産Ⅲ～唐古・鍵遺跡の石器～」	97
(3) 特別展示「田原本町内小学校の総合的な学習展示会」	100
(4) ミニ展示「綱にかける想い～田原本町大字矢部の「綱掛」～」	101
3. 入館者・ホームページ	
(1) 入館者数	102
(2) 夏季節電対策無料入館	104
(3) 入館者アンケート	105
(4) 視察・研修・学校等からの来館	105
(5) ホームページ	106
4. ボランティア	
(1) ボランティアガイドの実績	106
(2) 企画展受付ボランティア	106
IV. 資料の報告	
1. 唐古・鍵遺跡における弥生時代前期の魚類遺存体（丸山真史・藤田三郎）	109
2. 唐古・鍵遺跡から出土した編組製品等の素材の植物種 （小林和貴・鈴木三男・佐々木由香・能城修一）	117



I. 田原本町の埋蔵文化財

1. 町内における開発

(1) 町内における開発と発掘調査

本町における2015年度（平成27年度）の民間開発行為等による埋蔵文化財発掘届（第93条）は44件、地方公共団体等による通知（第94条）は14件で、計58件を数える。

本年度の発掘調査は11件である。内訳は、個人住宅等の建築2件、公共事業4件、民間開発5件である。

本年度は、総調査面積に対する出土遺物数が、1m²あたり約0.19箱と近年では高い比率を示している。これは、唐古・鍵跡第116次調査および第118次調査の2件で、合わせて200箱の出土量があったためである。特に第116次調査は弥生居住域のため出土量が多い。

第1表 田原本町における2015年度の発掘届・通知件数一覧

発掘届 93条	発掘通知 94条		発掘調査	工事立会	慎重工事	先行工事
44	14	通知内容	14	36	9	0
		実施分	町 11 県 0	41	-	-

*通知から実施までに年度をまたぐ場合がある為、件数は一致しない

第2表 田原本町の発掘届・通知と発掘調査件数の推移

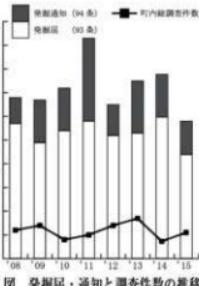
	'08	'09	'10	'11	'12	'13	'14	'15
発掘届(93条)	57	49	54	58	52	53	60	44
発掘通知(94条)	11	18	18	35	13	22	17	14
計	68	67	72	93	65	75	77	58
発掘件数	町	11	13	7	10	14	17	6
	県	1	1	1	0	0	0	0
町内総調査件数	12	14	8	10	14	17	6	11

第3表 町教育委員会が実施した発掘調査の原因別推移

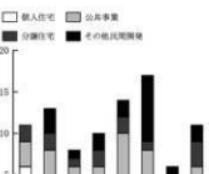
	'08	'09	'10	'11	'12	'13	'14	'15
範囲確認	0	0	0	0	0	0	0	0
個人住宅	6	4	2	1	4	3	1	2
公共事業	3	4	3	5	6	5	1	4
民間開発	分譲	2	2	1	2	2	1	3
その他	0	3	1	2	2	8	3	2
計	11	13	7	10	14	17	6	11

第4表 町教育委員会による調査の面積及び出土遺物数の推移

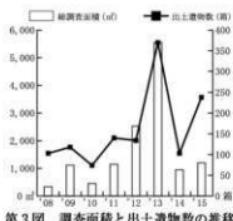
	'08	'09	'10	'11	'12	'13	'14	'15
総調査面積(m ²)	341	1,117	457	1,152	2,530	5,555	929	1,199
出土遺物数(箱)	103	118	74	140	134	370	103	238



第1図 発掘届・通知と調査件数の推移



第2図 発掘調査原因の推移



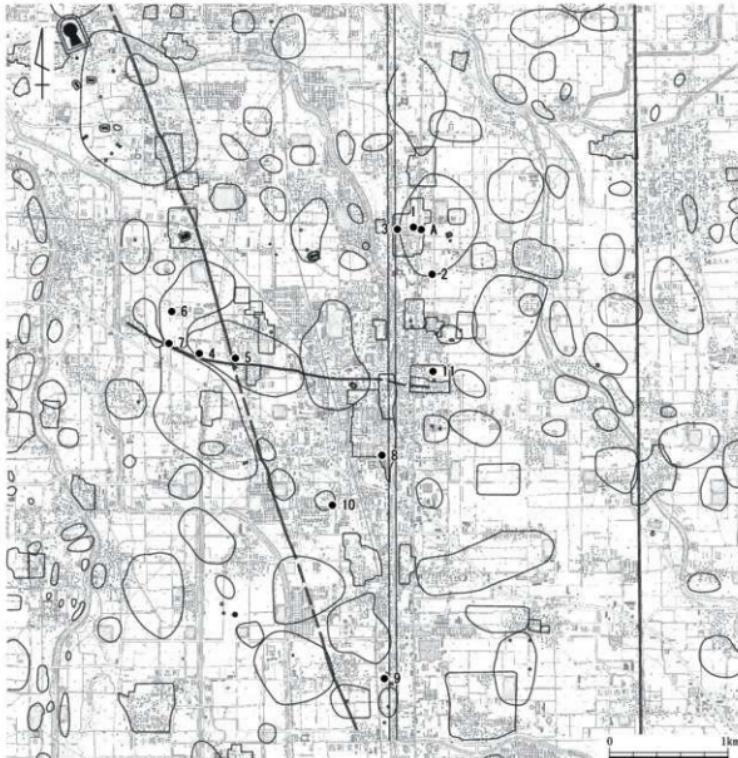
第3図 調査面積と出土遺物数の推移

2. 埋蔵文化財の調査

(1) 発掘調査の概要

本年度は11件の発掘調査を実施した。弥生時代～古墳時代では、唐古・鍵遺跡、保津・宮古遺跡、宮古北遺跡等で成果が得られた。唐古・鍵遺跡第116次調査では弥生時代中期の井戸・大溝等を検出し、同第118次調査では遺跡西部を巡る環濠を検出した。保津・宮古遺跡第42次調査では、弥生期の方形周溝墓1基を検出した。

中世では、唐古・鍵遺跡、宮古北遺跡、寺内町遺跡等で成果が得られた。唐古・鍵遺跡第116・118次調査では、唐古南氏の居館に関わるとみられる遺構を多数検出し、田原本町の中世遺構では初検出となる石組み井戸を各1基ずつ確認した。宮古北遺跡第20次調査では、保津・阪手道の側溝の可能性がある溝を検出した。



第4図 田原本町の遺跡と調査地点 (S = 1/40,000)

第5表 2015年度 発掘調査一覧表

遺跡名	次 敷	調査地		原 因 者	原 因	期 間	面 積	担 当	備 考
		種	出						
1. 唐古・鍵 第116次		田原本町大字鍵小字堀内311番1		個人	宅地分譲	2015. 7. 2 ~ 9. 7	190m ²	清水・荒井 吉川成美	受託事業
		生:時代:前 潟:大漁1条 生:時代中期:土坑2基、甕2条 生:時代中期:副立石墳1基、丹戸5基、土坑7基、柱穴6基、清3条 生:時代後期:土坑1基 中:世:丹戸1基、土坑2基、大漁2条 近:世:素顔小漁群				生:土器、上泊器、瓦器、 瓦質土器、輸入陶器、手作陶器、 瓦、埴輪、G器、木製品等			139箱
2. 唐古・鍵 第117次		田原本町大字鍵小字北庄17951番外 北側道路		田原本町長	下水道工事	2015. 11. 17 ~ 11. 19	7m ²	清水・荒井	下水道課
		近世以前: 渚1条、岡田1条 近世: 渚1条				上泊器、瓦等			1箱
3. 唐古・鍵 第118次		田原本町大字唐古小字堀内 301番1・305番1・306番1		脚マーク ヨーガレーシヨン	宅地分譲	2015. 1. 12 ~ 3. 9	480m ²	清水・荒井 吉川	受託事業
		生:時代中期: 大漁2条、清1条 生:時代後期: 大漁7条 中:世: 土坑:土坑2基、丹戸1基、大漁3条、素顔小漁群 近:世: 土坑12条、大漁1条、素顔小漁群				生:土器、上泊器、瓦器、 瓦質土器、輸入陶器、中世陶器、 近世陶器、瓦、木製品、石器、 參政院、鐵瓶、土質品等			61箱
4. 保津・ 宮古 第42次		田原本町大字吉古小字吉古4番1		個人	貸貸住宅の建築	2015. 5. 13 ~ 6. 2	90m ²	清水・荒井 吉川	受託事業
		生:時代: 形刃彌震1基 古期時代: 渚1条 古: 墓: 墓群 中:世: 素顔小漁群				生:土器、上泊器、瓦器等			12箱
5. 保津・ 宮古 第43次		田原本町大字吉古小字ヤケ西25番1・2		個人	個人住宅の建築	2016. 2. 16 ~ 17	9m ²	清水	岡本福助事業
		近世: 大漁1条、小漁2条				上泊器、瓦器、近世陶器、瓦、 木製品等			1箱
6. 宮古北 第19次		田原本町大字吉古小字田畠286番1		ならヨープ	タンク設置工事	2015. 9. 10 ~ 15	44m ²	清水・荒井 吉川	受託事業
		生:時代: 土坑2基、清1条、小漁2条 古期時代: 土坑3条、小漁2基、清1条				生:土器、上泊器等			1箱
7. 宮古北 第20次		田原本町大字吉古小字御田 175番5・171番5・172番5		田原本町長	道路駆削工事	2015. 11. 30 ~ 12. 25	140m ²	清水・荒井 吉川	建設課
		古期時代前半: 土坑2基、小穴2基、大漁1条、河跡2条 古期時代: 渚1条 古: 墓: 墓群: 河跡1条 中:世: 土坑2基、小漁2条				生:土器、上泊器、瓦器、 黑色土器、埴輪、木製品、石器等			15箱
8. 寺内町 第16次		田原本町小字南142番・143番		田原本町長	道路駆削工事	2015. 11. 6	44m ²	清水・荒井 吉川	建設課
		平安時代末期: 素顔小漁群 鎌倉時代: 渚1条、小穴1基 近:代: 素顔?基礎				上泊器、瓦器、中世陶器、瓦、 鐵瓦等			5箱
9. 多地区古墳推定地 隣接地		田原本町大字多小字南八反原345番 北側除外		田原本町長	下水道工事	2015. 11. 12 ~ 11. 16	13m ²	清水・荒井	下水道課
		中世?: 素顔10条				上泊器、瓦器、瓦質土器等			1箱
10. 三並 第1次		田原本町大字三並小字ソマ四264番1		個人	個人住宅の建築	2015. 12. 22	7m ²	清水	岡本福助事業
		中世: 小漁2条				輸入磁器、瓦			1箱
11. 岩手北 第7次		田原本町大字岩手小字林村209番1		支那住宅㈱	宅地分譲	2016. 3. 7 ~ 3. 16	175m ²	荒井	受託事業
		中:世: 素顔小漁群 時隔不明: 河跡1条				上泊器、樂器器、黑色土器、 中世陶器、瓦等			1箱

第6表 2015年度 試掘調査一覧表

遺跡名	調査地		原 因 者	原 因	期 間	面 積	担 当	備 考
	種	出						
A 唐古・鍵 9-201501	田原本町大字鍵小字内308番3 なし		田原本町長	史跡公園整備33か	2015. 5. 19	3.6m ²	清水隊	総合政策課 0箱

1. 唐古・鍵遺跡 第116次調査

1. 遺跡・既調査の概要

唐古・鍵遺跡は、奈良盆地の中央、標高約47m前後の沖積地に立地する、弥生時代を代表する環濠集落のひとつである。これまでの調査成果から、唐古・鍵遺跡の集落内部は、大きく北・南・西・中央の4地区に区分できることが明らかになっている。第116次調査は西地区中央部に位置する。平成27年度に宅地造成が計画され、共有道路となる部分について発掘調査を実施した。調査地の東側に第11・82次調査地があり、本調査地においても、弥生時代前期の集落遺構などが検出されることが想定された。

2. 調査の成果

(1) 層序

I : 暗褐色土〔検出標高48.2m、以下数値のみ記す〕、II : 暗青褐色土〔48.1m〕、III' : 橙褐色土〔48.0m〕、III : 茶灰色土〔47.9m〕、IV : 灰褐色土〔47.8m〕、V : 黄褐色細砂〔47.5m〕、VI : 黒色粘土〔47.4m〕、VII : 淡青灰色シルト〔微砂質〕〔47.3m〕、VIII : 淡青灰色シルト〔粘質〕〔47.2m〕

第I層は水田耕土層、第II層は水田床土層、第IV層は中世遺物包含層、第V層以下は地山となる。中世の遺構、弥生時代の遺構はとともに第IV層上面で検出した。

(2) 遺構と遺物

弥生時代前期

本調査地で検出した弥生時代前期の遺構は大溝1条のみであったが、東に隣接する第82次調査地では当該期の遺構が多数検出されており、弥生時代前期から居住区であったことが明らかとなっている。

S D - 201　調査区を縦断する大溝で、その一部を調査した。後世の遺構により大半が壊されており、その推定幅は4.2m、深さは0.8m以上である。出土土器の時期は、大和第I-2様式である。第74次調査区で検出されたS D - 201の堆積土、時期、規模、方向が共通することから、同一遺構の可能性が高い。

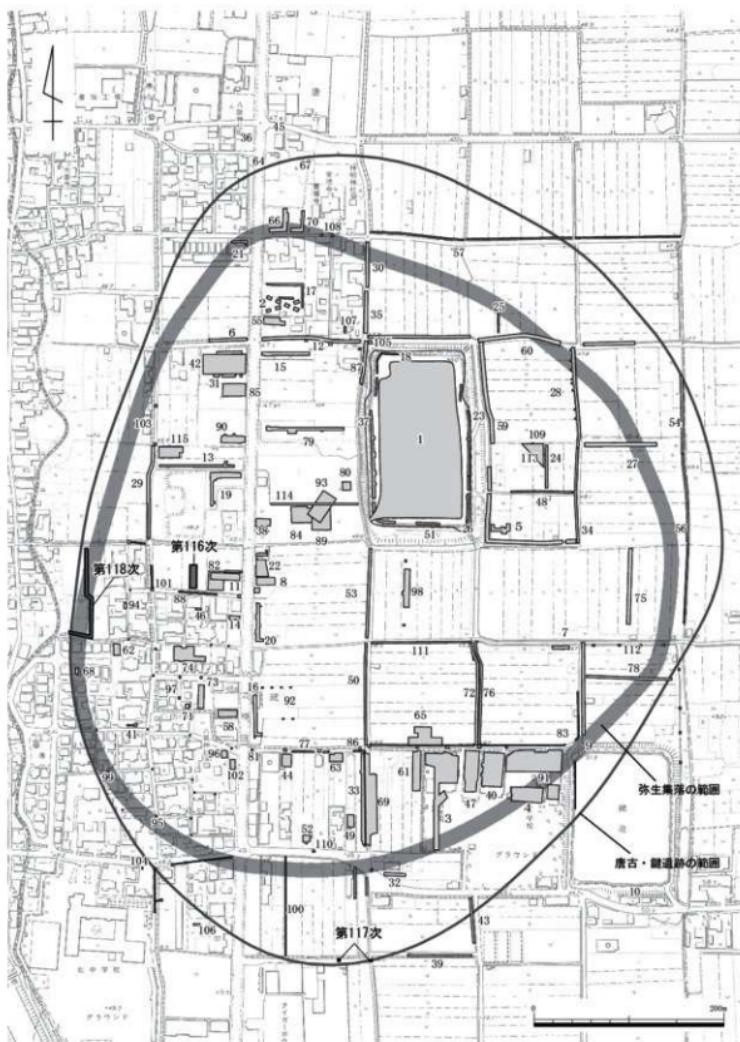
弥生時代中期

S D - 151・152　調査区の西側で検出した溝で、S D - 201の最終堆積の可能性も考えられる。これらの2条の溝の時期は大和第II-1様式である。

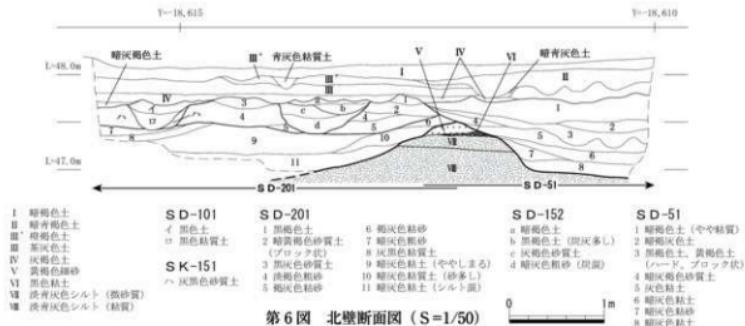
S K - 201　調査区北側で検出した土坑で、S D - 152を切る。南北1.3m、東西1.5m、深さ0.8mの方形である。この土坑からは、大型蛤刃石斧や結晶片岩製の石庖丁が出土した。この土坑の性格は不明である。出土した遺物は第10図に示した。1~3は広口壺である。時期は大和第II-1様式である。

S K - 101　調査区北側で検出した土坑である。直径は2.3m、深さ1.6mである。上層は初を含む炭灰層であった。S K - 101からは、甕（第11図-1）、高壺（第11図-2・3）、台付鉢（第11図-4）が出土した。時期は大和第IV-1様式である。

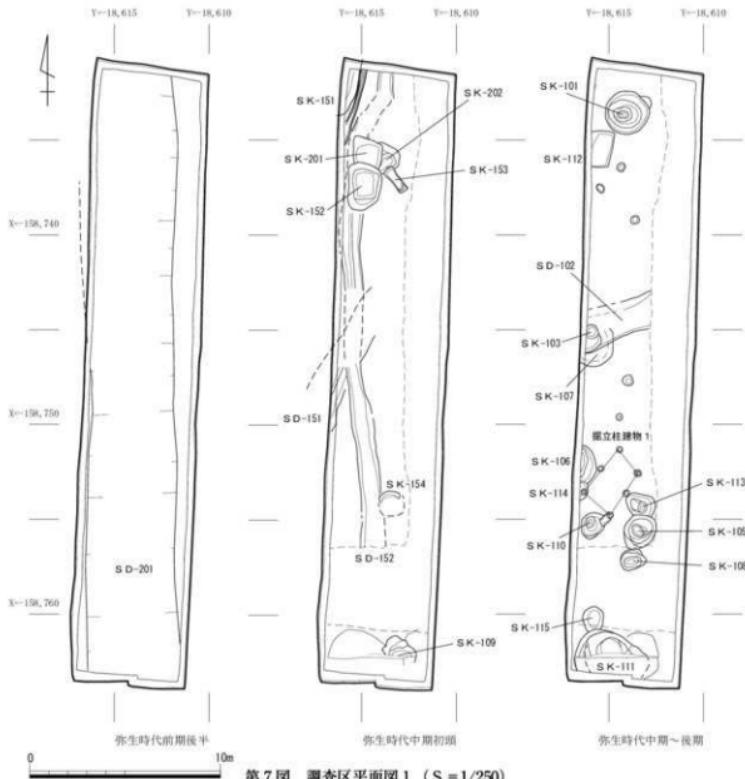
S K - 105　調査区南側で検出した井戸で、直径1.5m、深さ1.6mである。底から、口縁部の一部



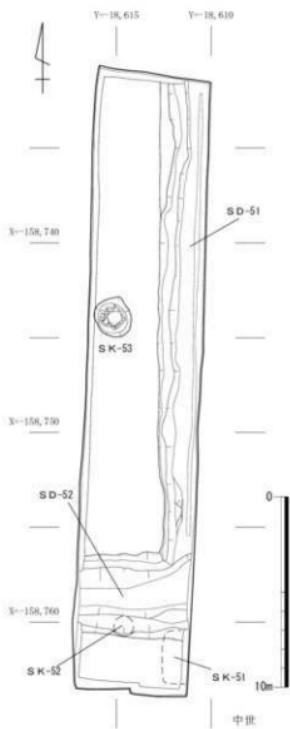
第5図 調査地位置図 (S = 1/5,000)



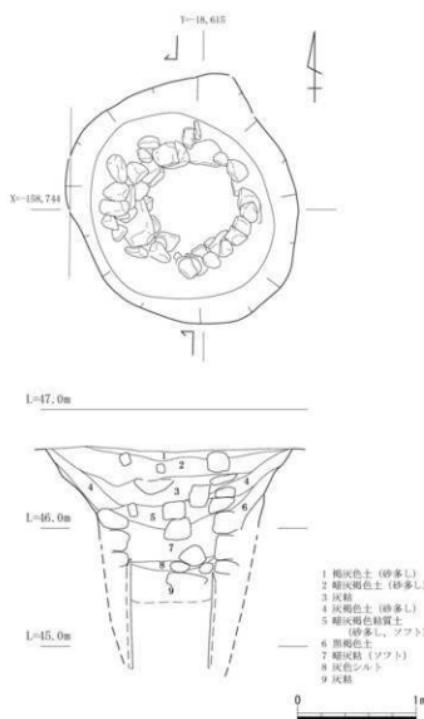
第6図 北壁断面図 (S=1/50)



第7図 調査区平面図1 (S=1/250)



第8図 調査区平面図2 (S = 1/250)



第9図 SK-53 平面図および断面図 (S = 1/40)

と脚台部が欠損した水差形土器（第11図-5）、鉢（第11図-6）が出土した。時期は大和第III-4様式である。

掘立柱建物1 調査区中央やや南寄りで検出した、桁行2間、梁間1間の掘立柱建物である。建物の長軸は北東-南西である。遺物の出土量が僅少であったため、時期は特定できないが、SD-152上で柱穴を検出したことから、弥生時代中期以降の造構と考えられる。

弥生時代後期末

SK-111 調査区南端で検出した土坑である。北半分を調査（南半は調査区外）し、上層で庄内期の完形の小形甕（第11図-8・9）が出土した。

中世

SD-51・52 調査区東側を縱断する大溝（SD-51）に、調査区南側の東西方向の大溝（SD-52）が取りつき、逆「L」字形を呈する。SD-51から出土した遺物を第12図に、SD-52から

出土した遺物を第13図に示した。

第12図-1～3は土師器皿、4・5は土師器の壺、6～10は土師器の羽釜である。

第12図-11は瓦質の片口壺、12は瓦質の鉢である。第12図-13は陶器である。橙赤褐色の胎土に灰釉が施釉されている。美濃産と推定される。第12図-14・15は、青花碗である。両者とも中国福建省から輸入磁器とみられる。14の外には灰が付着している。また、15の破面には漆が付着しており、破損した後に漆で接着して使用していたと考えられる。このほか、多数の桃核、漆器椀や下駄も出土している。第13図-1～5は土師器皿、6～8は土師器の羽釜、9は瓦質の羽釜である。

これらの遺物から、SD-51・52は16世紀頃に同時に開口していたと考えられる。既往の調査で検出された中世大溝は、14・15世紀と16世紀の大きく2時期に分けることができ、今回の調査の検出例は後者にあたる。

S K-53 調査区中央西側で検出した石組み井戸である（第9図）。長軸2.1m、短軸1.8m、深さ2m以上である。井戸の石組みの上段は井戸内に崩落しており、機能時に石が何段積まれていたのかは不明だが、部分的に5段の石が残存していた。さらに、石組みの下は八角柱状に組み合わせた板材を井戸枠としていた。このことから、井戸下部は板組、上部は石組の構造と考えられる。最終埋没時には、土器も投棄されており、SK-53の下限は16世紀頃と考えられる。

近世

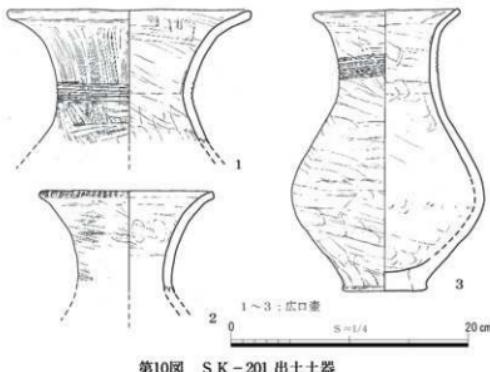
素掘小溝群 調査区全体で、主として南北方向の小溝群を検出した。

4.まとめ

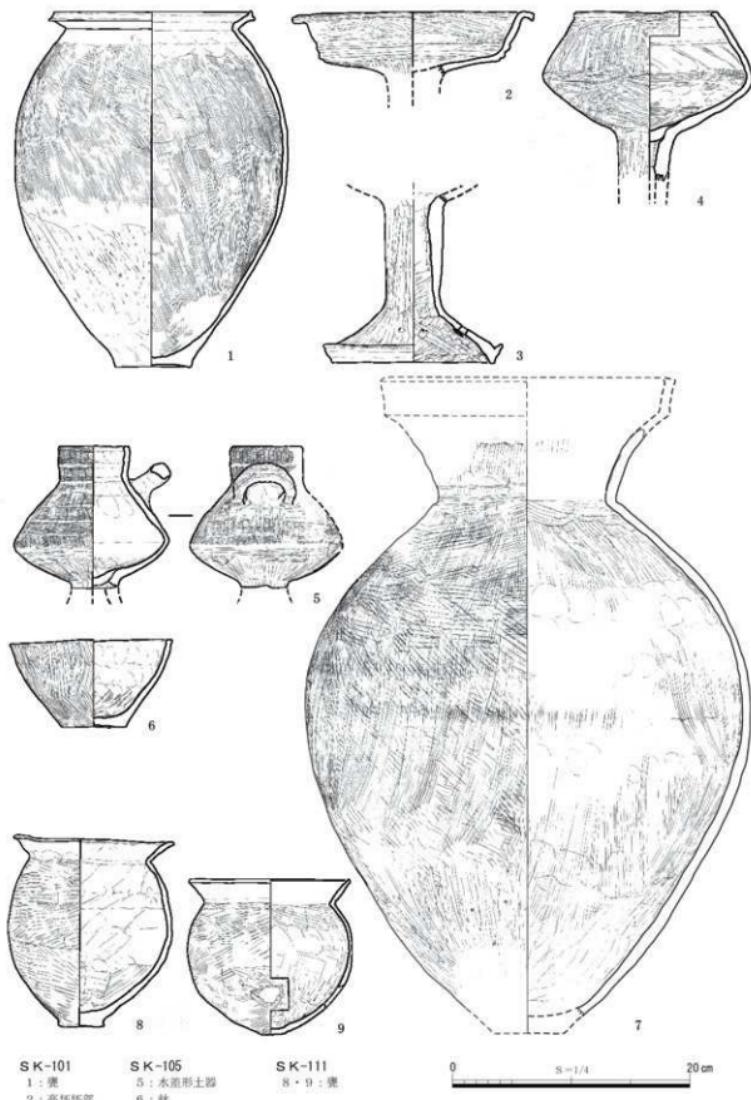
弥生時代前期後半から中期初頭にかけて、大溝が調査区を縦断していた。この溝は、第74次調査区で検出されたSD-201と接続する可能性を考えられ、接続するならば、大溝の延長は南北軸で75m以上におよぶ。唐古・跡遺跡では南北軸に合う大溝はこれまでに検出されておらず、今後、どのような性格の溝になるのかを検討する必要がある。

弥生時代中期以降は、掘立柱建物のほか井戸などが確認できることから、居住区であったと考えられる。このことから、居住域の西限が第82次調査地（弥生時代前期）から第116次調査地（弥生時代中期以降）へと拡大したと推定できる。

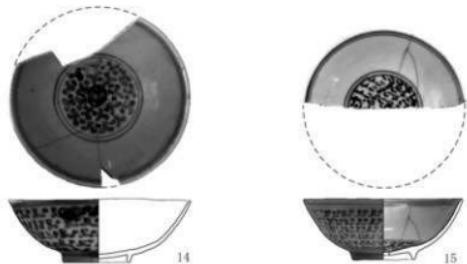
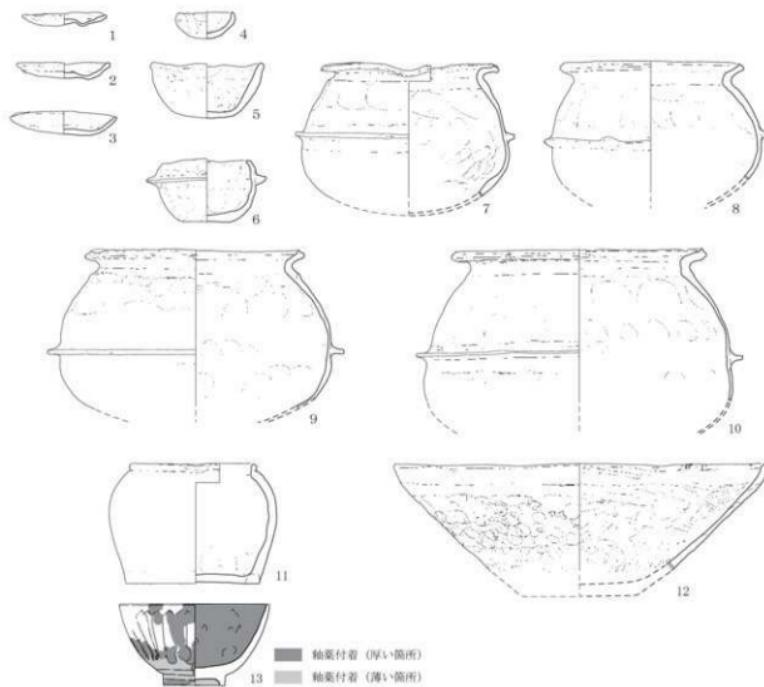
中世（16世紀頃）の逆「L」字形の大溝は、唐古南氏に関係する遺構の可能性が高い。また、調査区中央西側で検出された中世の石組み井戸は、田原本町内で初の検出例となった。



第10図 SK-201 出土土器



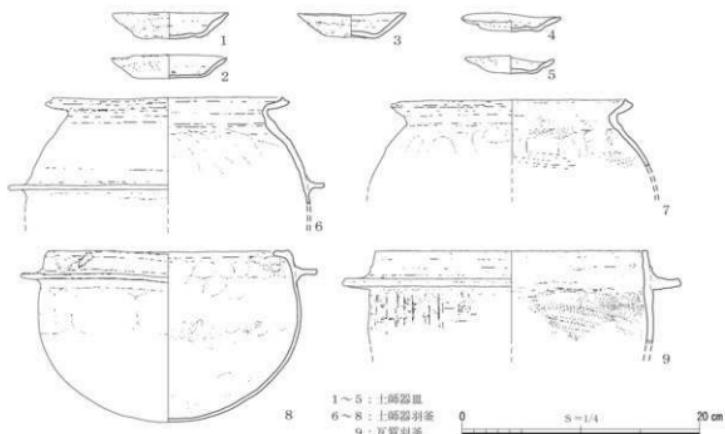
第111図 弥生時代出土土器



- 1～3：土師器皿
4・5：土師器坏
6～10：土師器羽釜
11：瓦質片口釜
12：瓦質鉢
13：美濃系？塊
14・15：青花碗



第12図 SD-51 出土遺物



第13図 SD-52 出土遺物



写真1-1 SK-201 遺物出土状況（南から）



写真1-2 中世大溝完掘状況（南から）



写真1-3 SK-53 完掘状況（西から）



写真1-4 SD-51・52 出土土器

2. 唐古・鍵遺跡 第117次調査

1. 既調査の概要

今回の調査地は、遺跡南端に位置する。下水道工事に伴う調査で、付近では第100次調査で飛鳥時代の河跡等を確認しているものの、弥生時代関連の遺構は確認していない。今回の調査により、飛鳥時代頃の河跡の拡がりと周辺地形についての情報が得られることが期待された。

2. 調査の成果

(1) 層序

調査地の現状は道路である。人坑2ヶ所について発掘調査を実施したが、東側の第1トレンチは全体が近世以前の大溝内であったため、第2トレンチの層序を基本層序として示す。

I : アスファルト〔検出標高48.9m、以下数値のみ記す〕、II : 暗青褐色砂礫土（改良土）〔48.8m〕、III : 黄褐色粗砂〔48.6m〕、IV : 暗青褐色粘質土〔48.55m〕、V : 暗青灰色粘土〔48.45m〕、VI : 青褐色粘質土〔48.25m〕、VII : 暗灰褐色砂質土〔48.2m〕、VIII : 橙褐色粘質土〔48.1m〕

第I～III層は現代の道路開発に伴う造成層、第IV層は旧耕土、第VIII層は時期不詳の洪水堆積層、第VII層以下が地山である。近世の遺構は第VII層上面で、古代頃の遺構は第VIII層上面で検出した。

(2) 遺構と遺物

古代？

SD-2051 第2トレンチで検出した北北西～南南東方向の溝である。幅0.9m、深さ0.1mを測る。堆積土は粗砂質で、顕著な遺物は出土していない。遺構の時期と性格は不明。ただし、近接する第100次調査で確認した飛鳥時代の河跡と一連の遺構である可能性がある。

SD-1051 第1トレンチ全体が南北方向の溝である。調査区は遺構の東肩付近に相当する。溝幅不明、深さ0.9m。堆積土の大半は粗砂である。顕著な遺物が出土していないため、時期と性格は明らかでない。

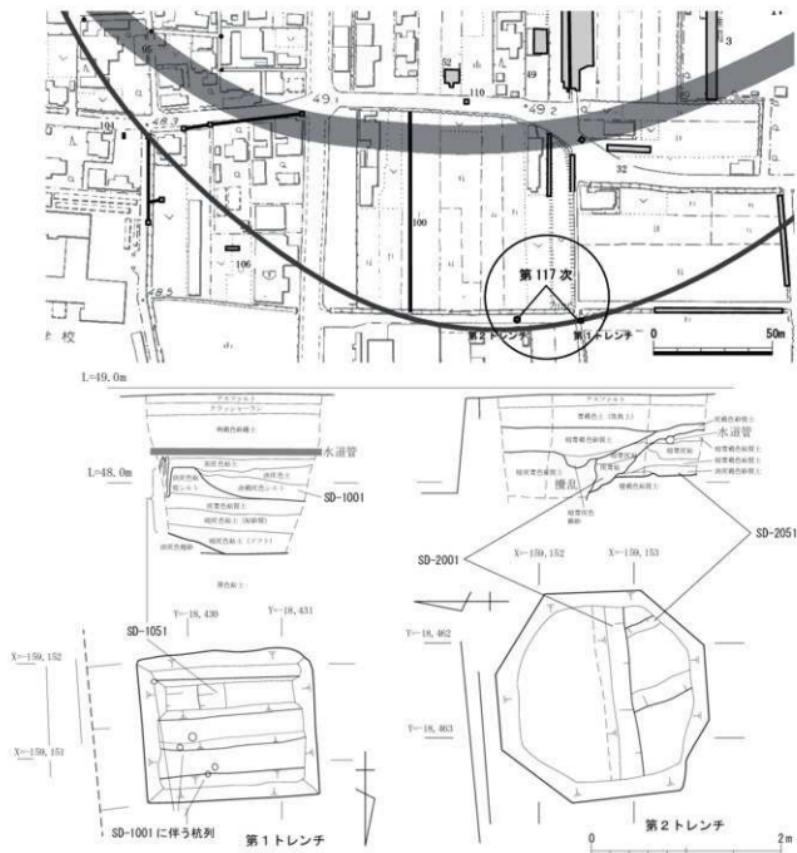
近世～近代

SD-1001 第1トレンチで検出した溝跡である。南北方向とみられるが、東西方向溝との交差点に相当する可能性がある。深さ0.4mを測る。この遺構に伴う杭列は北北西～南南東方向に並ぶ。近世～近代の遺物が出土した。

SD-2001 第2トレンチで検出した東西方向の溝である。北半が過去の水路工事で搅乱を受けたため、溝幅と深さは明らかでない。堆積土などから近世の遺構とみられる。

3. まとめ

今回の調査では、近世の溝跡、古代頃の可能性がある溝または河跡などを確認した。一方、弥生集落としての唐古・鍵遺跡関連の遺構・遺物は確認できなかった。



3. 唐古・鍵遺跡 第118次調査

1. 既調査の概要

今回、遺跡西端で宅地分譲が計画され、道路となる部分について調査区を設けて発掘調査を実施した。調査区は、若干蛇行する逆L字形で、延長140m、幅4mの480m²を測る。過去の調査成果から、弥生時代の環濠帯が拡がることが予想された。

2. 調査の成果

(1) 層序

調査地の現状は宅地である。最近まで水田であったが、調査着手の半年前に造成がおこなわれた。I : 淡黄褐色砂礫土〔検出標高47.4m, 以下数値のみ記す〕、II : 暗青褐色土〔47.0m〕、III : 青褐色土〔46.85m〕、IV : 暗茶灰色土〔46.75m〕、V : 橙褐色土(ハード)〔46.6m〕、VI : 淡黄灰色粘土(シルト質)〔46.45m〕、VII : 淡黄灰色シルト〔46.3m〕、VIII : 黒色粘土〔46.1m〕、IX : 青灰色シルト〔45.9m〕

第I層が現代造成土、第II層は旧水田耕土、第IV層は近世遺物包含層、第V層が地山の可能性をもつ橙褐色土である。弥生時代中期～中世の遺構はこの第V層上面を検出面とする。

(2) 遺構と遺物

弥生時代

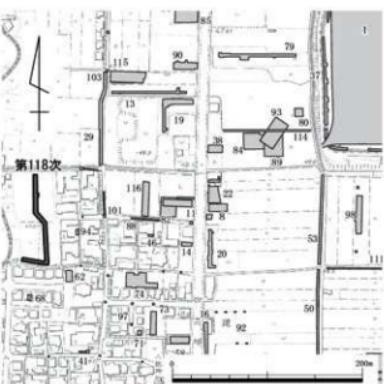
S D-101 調査区北端で検出した北東～南西方向の大溝である。近世の粘土採掘坑に切られ、東壁などに断片的に残存するのみである。このため、遺構の規模と時期詳細は不明。

S D-102 調査区北半で検出した北東～南西方向の大溝である。幅9m、深さ1.2mを測る。堆積土は淡褐色粗砂が中心で、蛇行気味であることから流水の激しい遺構の可能性もある。調査区南西端で検出したS D-106とは規模と堆積土から同一遺構となる可能性が高い。遺物は、中層から弥生時代後期の長頸壺片などが少量出土した。

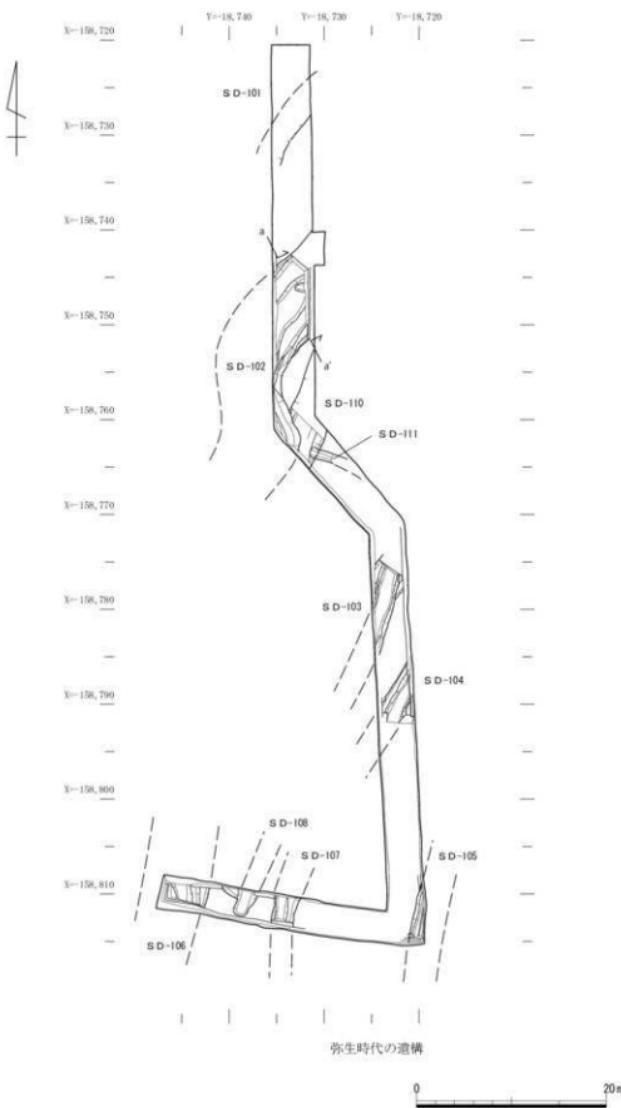
S D-103 調査区中央で検出した北東～南西方向の大溝である。幅3.8m、深さ1mを測る。遺物は僅少であるが、下層からはほぼ完形の長頸壺1点が出土した。弥生時代後期の遺構と考えられる。

S D-104 S D-103の南側で検出した北東～南西方向の大溝である。幅2.8m、深さ0.9mを測る。S D-103とは幅3mの間隔を空け、並行に掘削されている。なお、遺構の南半は中世大溝に切られる。遺物は、甕片などが少量出土している。弥生時代後期の遺構と考えられる。

S D-105 調査区南東端で検出した北北



第15図 調査位置図 (S = 1/5,000)



第16図 遺構平面図 1 (S = 1/500)

東 - 南南西方向の大溝である。西肩のみの検出であるが、深さ0.8mを測る。弥生時代後期頃の遺構とみられる。

S D - 106 調査区南西端で検出した南北方向の大溝である。調査区外に拡がるため幅不明、深さ1mを測る。堆積土はS D - 102と同様の粗砂であり、両者は同一遺構となる可能性が高い。遺物は僅少で、本遺構のみでの時期決定は困難であるが、S D - 102との関係から弥生時代後期の遺構と考えられる。

S D - 107 調査区南部で検出した南北方向の大溝である。幅2.5m、深さ0.8mを測る。遺物は弥生土器小片が少量出土したのみであり、詳細な時期は明らかでない。堆積土と遺構の位置から、S D - 104と同一の遺構である可能性がある。

S D - 108 調査区南部でS D - 107の西側に隣接して検出した北北東 - 南南西方向の大溝である。溝幅2m、深さ0.4mを測る。調査区南端で収束しており、環濠の端部となる可能性がある。位置関係から、S D - 103と同一の遺構である可能性がある。

S D - 110 調査区中央、S D - 102南肩付近で検出した、北北西 - 南南東方向の大溝である。幅4.5m、深さ1m。S D - 102に切られる。遺物は、弥生時代中期頃の土器片が少量出土した。

中世

小溝群 調査区中央を中心に、東西方向・南北方向の小溝を多数検出した。調査区中央北付近の溝から半完形の瓦器塊2点などが出土しており、遺物から13世紀前後の耕作に伴う小溝群と考えられる。

S D - 64 調査区中央で検出した、東西方向の大溝である。幅5m、深さ0.8mを測る。遺物は少ないが、中世末～近世初頭頃の土師質土器等が出土した。

S D - 70 調査区中央南で検出した東西方向の大溝である。幅2.4m、深さ1mを測る。土師皿等の16世紀頃の土器が出土した。後述するS D - 70Bを北肩寄りで再掘削したものと考えられる。

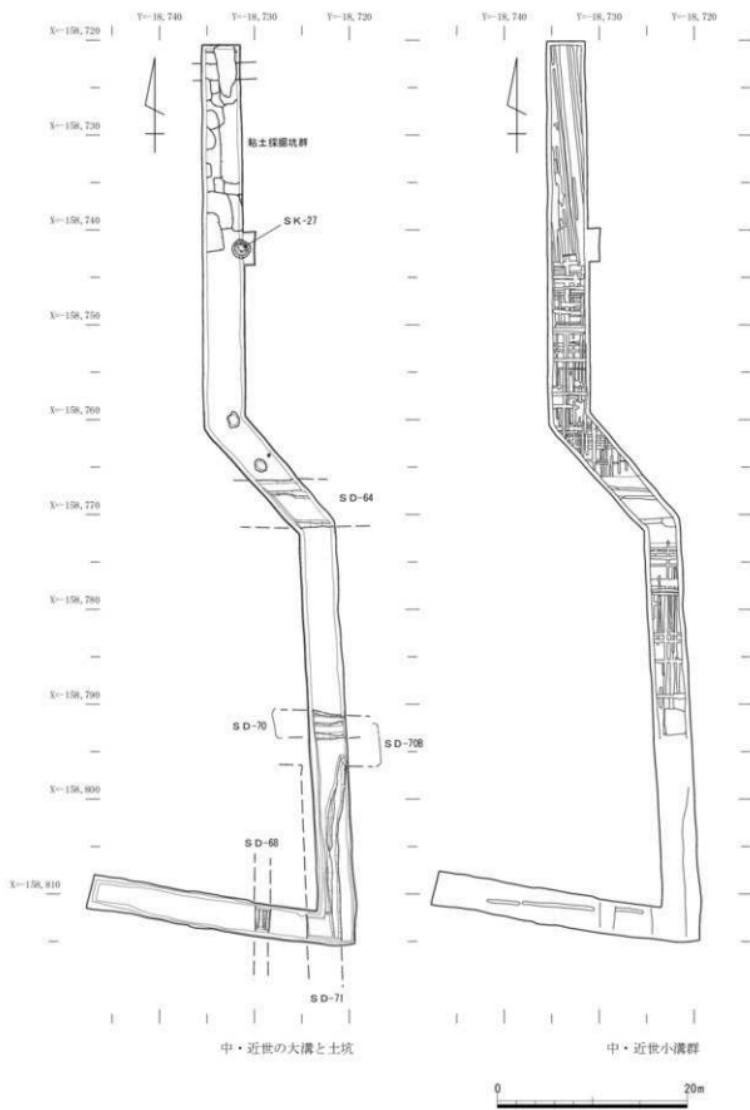
S D - 70B S D - 71と同時期に開口していたとみられる東西方向の大溝である。北肩がS D - 70に切られるため詳細な遺構の規模は不明。14世紀前後の遺構であろう。

S D - 71 調査区南側で検出した南北方向の大溝である。幅3.8m、深さ1.2mを測る。S D - 70BとはT字形に合流する。なお、S D - 70Bとの分岐点から南へ2.5mの地点で杭列を確認した。堰のような構造物とみられる。土師皿・瓦器塊等の14世紀頃の土器、曲物容器底板等の木製品が出土した。

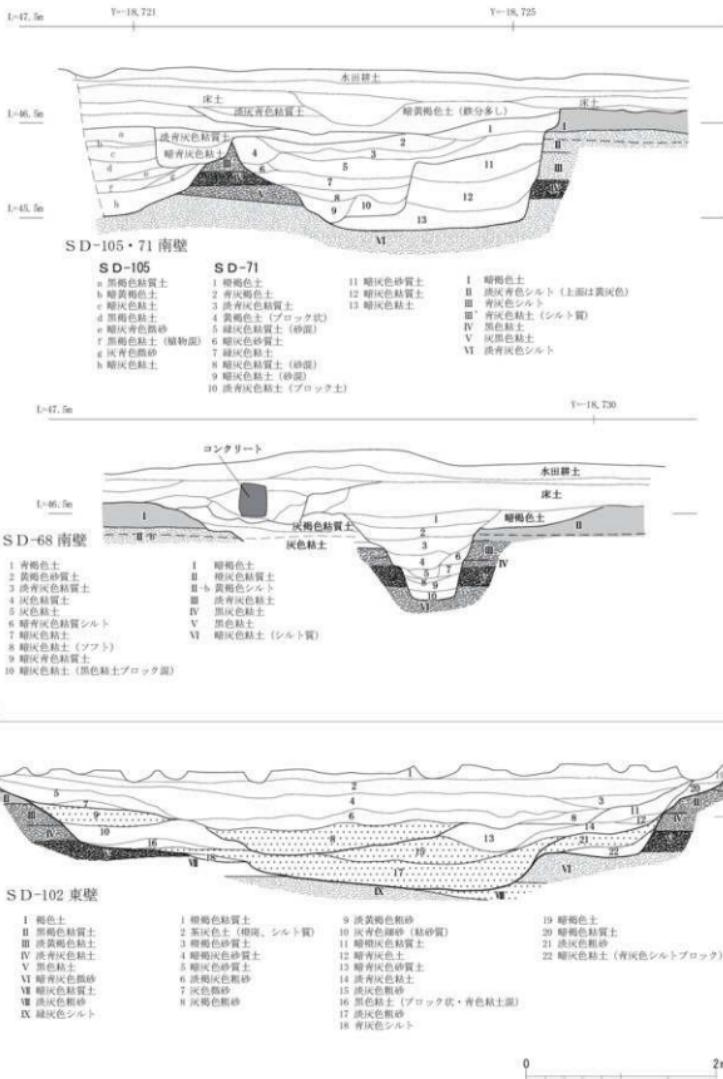
S K - 27 調査区北半で検出した円形の井戸である。直径2m、深さ1.7mを測る。4段構造で、上段は3段の石組み、中段上位は直径66cm・高さ48cmの桶、中段下位は直径52cm・高さ42cmの桶、下段は直径50cm・高さ40cmの曲物容器が井戸枠として設置されていた。上段の埋土から大型の羽釜1点などが出土した。14世紀前後の遺構と考えられる。

近世・近代

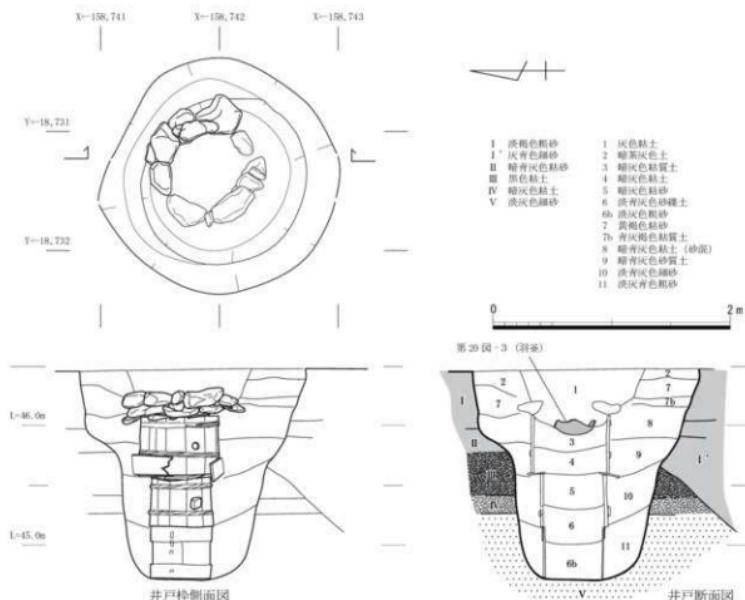
粘土探掘坑 調査区北部で近世頃の土坑群を検出した。調査区北端から南に25mまでの範囲で12基を確認した。1辺2m前後の隅丸方形のもの、南北8m、幅3m前後の不整形のものなどがあり、それぞれ深さは1m前後を測る。調査地の近くには、戦時中まで今里で瓦業を営んでいた石田家があり、近世には瓦師平七の屋号で近隣の寺社に瓦を供給していた。今回検出した土坑群は、瓦生産に伴う粘土の探掘がおこなわれた跡と考えられる。出土遺物は僅少であったが、若干の近世陶磁器



第17図 遺構平面図2 (S = 1/500)



第18図 遺構断面図 (S = 1/50)



第19図 SK-27 平面図および断面図 (S = 1/40)

を含むことから、近世頃の遺構と考えられる。

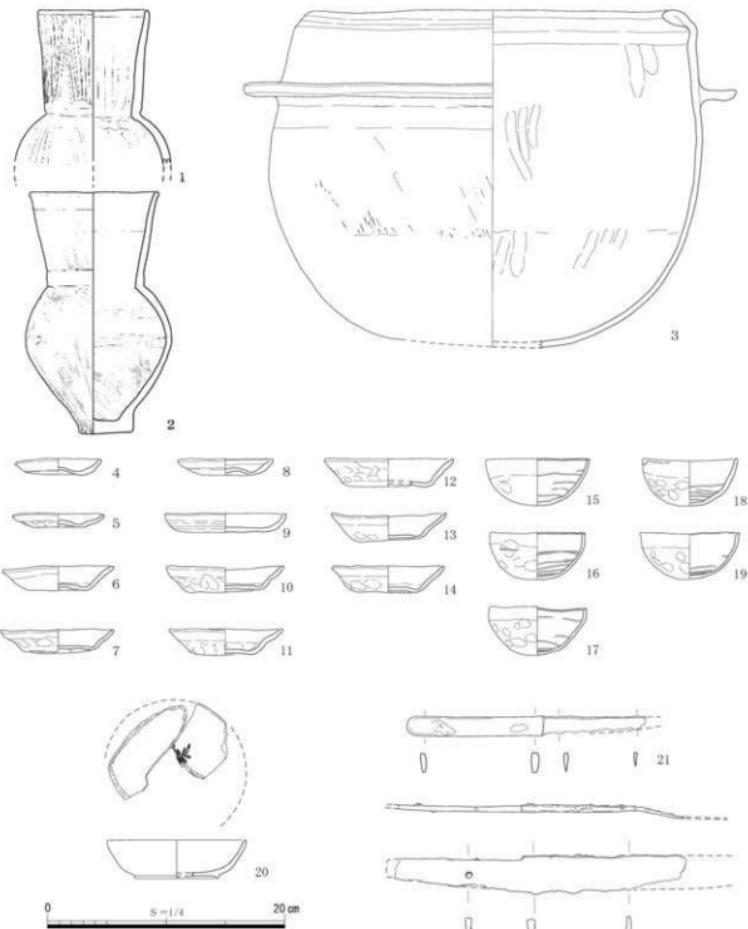
小溝群 調査区北部の粘土探掘坑の上面で小溝群を検出した。いずれも北北西-南南東方向で、中世の小溝群と主軸が異なる。近代頃の耕作に伴う遺構とみられる。

3. 出土した遺物

第20図-1は、SD-102下層から出土した長頸壺である。胴部下半が欠損する。大和第VI-2様式頃の遺物とみられる。2は、SD-103下層から出土した長頸壺である。ほぼ完形。大和第VI-3様式頃の遺物とみられる。

3は、井戸SK-27から出土した土師質羽釜である。器高28.4cm、口径29.6cmの大形品である。14世紀頃の遺物とみられる。4~19は、SD-71から出土した土師器・瓦器である。4~14は土師器小皿、15~19は湯飲形瓦器塊である。20はSD-71から出土した漆器椀である。内外面は黒漆仕上げ、見込みに赤漆で植物を描く。14世紀頃の遺物とみられる。

21はSD-71から出土した刀子、22・23はSK-27から出土した刀・鎌である。21の柄は銅製で、僅かに金箔状の付着物が残る。



1 : 長頸壺 (SD-102 下層)

2 : 長頸壺 (SD-103 下層)

3 : 土師器引釜 (SK-27)

4 ~ 14 : 土師器皿 (SD-71)

15 ~ 19 : 酒飲形瓦器皿 (SD-71)

20 : 瓦器柄 (SD-71)

21 : 刀子 (SD-71)

22 : 刀 (SK-27)

23 : 剣 (SK-27)

第20図 出土遺物



写真3-1 調査地航空写真（左が北）



写真3-2 SD-102 完掘状況（南から）



写真3-3 環濠群完掘状況（西から）

4.まとめ

今回の調査では、弥生時代中・後期、中世、近世の各時期の遺構を検出した。弥生時代の遺構としては、唐古・鍵ムラの環濠と推定される弥生時代後期の大東北-南西方向の大溝5条、中期の北北東-南南西方向の大溝1条を検出した。なお、SD-102は粗砂堆積で規模が大きく、蛇行していることから、粘土堆積のSD-103~105と様相が大きく異なる。周辺の調査成果を含め、弥生時代後期の環濠のありかたについて検討する必要がある。

中世の遺構としては、14世紀の唐古南氏居館跡に関わるとみられる大溝と、上段が石組の井戸1基を検出した。居館の構造を考える上で大きな成果と考えられる。

近世の遺構としては、調査区北端付近で多数の粘土採掘坑を検出した。瓦製作のための粘土採掘がこの地域で盛んにおこなわれたことが明らかとなった。



写真4-1 SD-64 完掘状況（南から）



写真4-2 SD-70 完掘状況（西から）



写真4-3 近世土坑群（北から）



写真4-4 SK-27 石組みの敷板検出状況（西から）



写真4-5 SK-27 一段目検出状況（西から）



写真4-6 SK-27 完掘状況（東から）

4. 保津・宮古遺跡 第42次調査

1. 遺跡・既調査の概要

保津・宮古遺跡は、奈良盆地の中央、標高46m前後の沖積地に立地する。これまで41次にわたる発掘調査を実施しており、縄文時代～中世の複合遺跡であることが確認されている。特に、奈良盆地低地部としては僅少な縄文時代後期の集落遺跡を検出していることは特筆される。また、弥生時代前期前半に遡る集落遺構を確認しており、中期・後期の集落遺構が点在することも判明している。さらに、北西に隣接する宮古北遺跡とは一連となる形で古墳時代集落の遺構が点在し、特に宮古北遺跡では方形プランの区画溝をもつ集落が存在するとみられる。

古墳時代中・後期にも遺跡各所で土坑・溝を確認しているほか、飛鳥～奈良時代の建物群もみつかっており、大王の直轄地である「倭屯倉」の管理に関わる重要な遺跡である可能性も考えられる。

今回の調査は、遺跡南西部での賃貸住宅建築に先だって実施した。建物の基礎による影響は柱状改良による5%未満ではあったが、重要遺跡として認定された遺跡での工事であるため、建築予定地内的一部に18×5mの調査区を設定して調査をおこなった。

2. 調査の成果

(1) 層序

調査地の現状は畑で、最近までビニールハウスでの作物栽培をおこなっていた。

I : 暗青褐色土〔検出標高45.8m、以下数値のみ記す〕、II : 暗青褐色土〔45.65m〕、III : 暗橙褐色土〔45.5m〕、IV : 暗灰褐色土〔45.4m〕、V : 暗褐色土〔45.35m〕、VI : 黒褐色土〔45.2m〕、VII : 灰褐色粗砂〔45.2m〕、VIII : 黄灰色砂質土〔45.2m〕、IX : 黒褐色土〔粘砂質〕〔45.15m〕

調査では、古代～中世の遺構を第VI層上面で検出し、弥生時代～古墳時代の遺構を第VII層上面で確認した。なお、調査区南西部は時期不明の河跡による影響を受け、暗灰褐色粗砂層上面が古代～中世の遺構検出面となっていた。

(2) 遺構と遺物

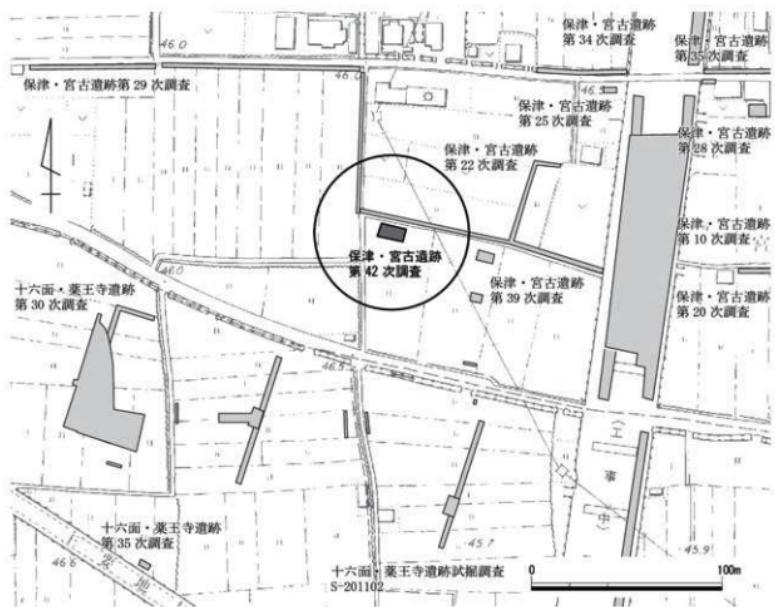
弥生時代～古墳時代

SD-101　調査地東半で検出した溝である。幅1.6～2.0m、深さ0.4mを測る。南半は南南東～北北西方向であるが、北半は東北東方向に屈曲する。方形周溝墓の北西コーナー部である可能性が高い。遺物は、弥生時代後期後半の壺、甕等が出土した。

SD-103　調査区西半で検出した溝状遺構である。幅1.5m前後、深さ0.1m前後を測る。遺物が僅少であるため詳細な時期は不明。須恵器等を含むことから、古墳時代後期の遺構と考えられる。

古代・中世

建物群　調査区全体で多数の柱穴を検出した。1辺0.4～0.6m、深さ0.3m前後の方形プランの柱穴が多いが、一部直径0.3m前後の楕円形プランのものもみられる。柱穴が錯綜しているため明確な建物プランは不明であるが、複数棟の建物が何處か建て替えられながら存続していた可能性がある。なお、柱穴から出土した土器が僅少であるため詳細な時期は不明であるが、基本的には奈良～平安時代頃の遺構と考えられる。



第21図 調査地位置図 (S = 1/2,500)

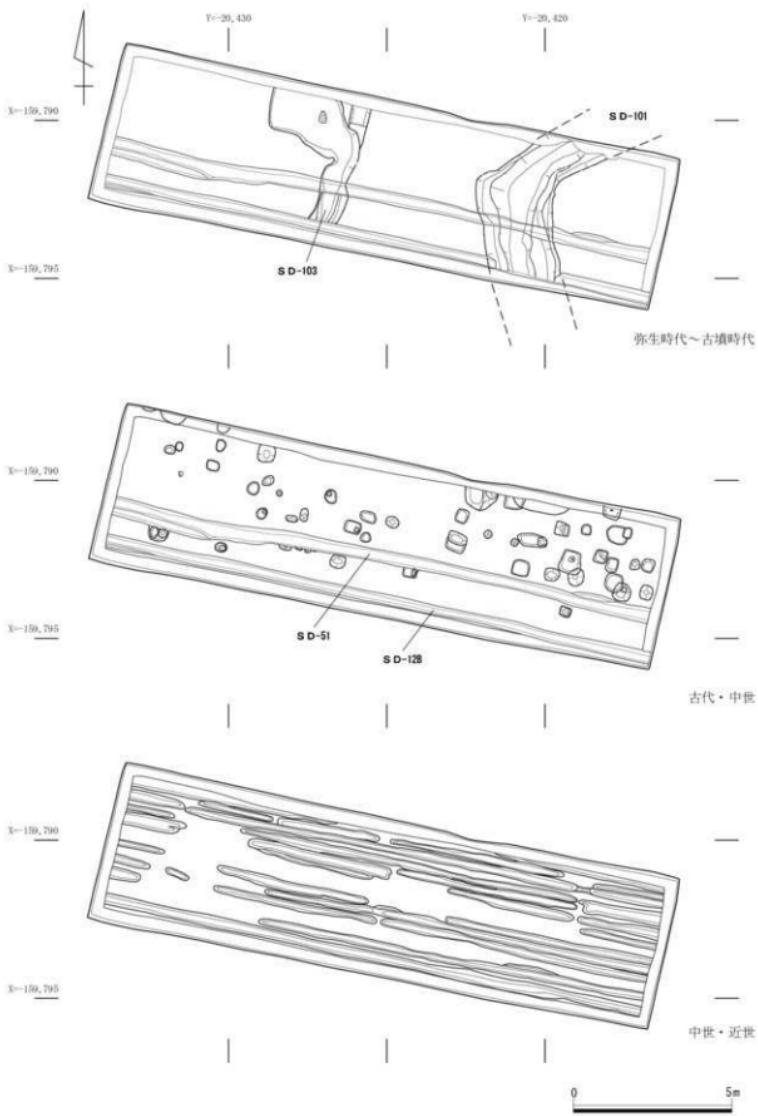
S D - 51　調査区南側で検出した、東南東－西北西方向の小溝である。幅0.4m、深さ0.3mを測る。鎌倉時代頃の瓦器片が出土していることから、鎌倉時代前後の遺構と考えられる。素掘小溝群を構成する1条ともみられるが、他の溝と比較して深いことから、屋敷地の区画を目的とした遺構である可能性も考えられる。また、南側1mに平行して掘削されたSD - 12Bもほぼ同時期の遺構とみられる。

小溝群　調査区全体で東南東－西北西方向の小溝多数を確認した。幅0.3m前後、深さ0.1m前後を測る。中世～近世の耕作に伴う小溝であると考えられる。

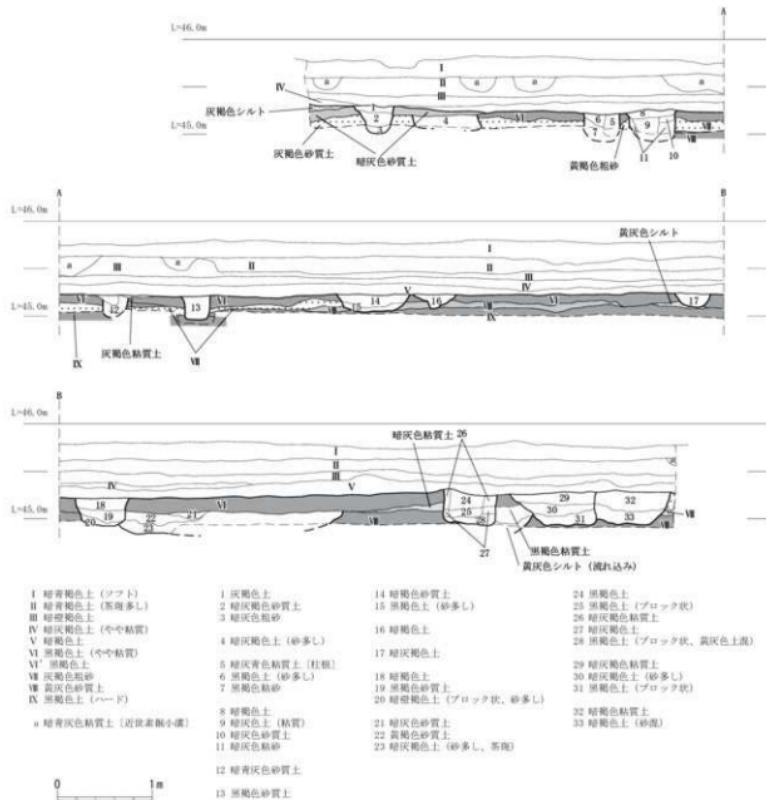
3.まとめ

今回の調査では、保津・宮古遺跡の弥生時代後期頃の墓域についての情報を得ることができた。また、古代の建物群が拡がること、中世には耕地となっていたことを確認することができた。

弥生時代後期の方形周溝墓は、出土した土器群から後期後半頃の遺構とみられる。点在気味に拡がる集落域に対し、比較的近接した位置に墓域が形成されていたことが判明した。



第22図 調査区平面図 (S = 1/150)

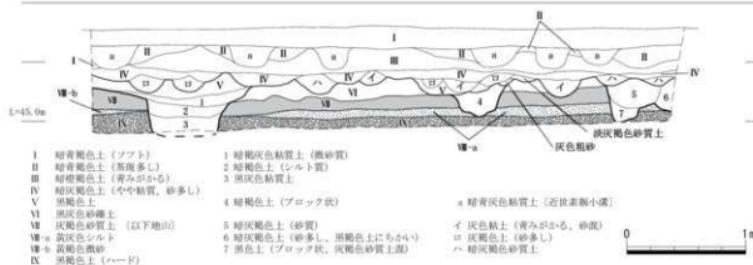


第23図 北壁断面図 (S = 1/50)

古代の建物群は、北側に隣接する第22次調査でも数棟分の建物跡を確認していることから、今回の調査でも多数検出されることが予想されていた。調査により、想定通り建物群の拡がることを確認することができたが、詳細な時期と建物プランについては調査面積の制約もあり確定することができなかった。

鎌倉時代頃には比較的深い小溝2条が掘削されていた。これらの遺構の性格は不明であるが、敷地の区画溝である可能性もあり、また耕地に伴う溝である可能性もある。今後の検討が必要と考えられる。

L=46.0m



第24図 調査区東壁断面図 (S = 1/40)



写真5-1 古代遺構完掘状況（東から）



写真5-2 弥生時代遺構完掘状況（東から）



写真5-3 SD-101 完掘状況（北西から）

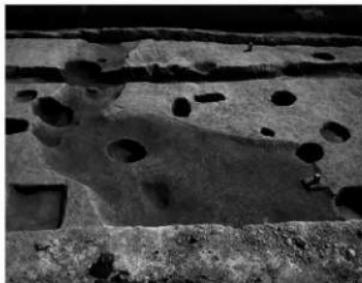


写真5-4 SD-103 完掘状況（北から）

5. 保津・宮古遺跡 第43次調査

1. 遺跡・既調査の概要

保津・宮古遺跡は、奈良盆地の中央、標高47m前後の沖積地に立地する。縄文時代後期・弥生時代～古墳時代後期の集落跡、古代の官衙推定地、中世の集落跡などからなる複合遺跡である。特に、北北西～南南東方向に遺跡を縱断する筋道（太子道）、西北西～東南東方向に遺跡を横断する保津・阪手道が遺跡中央で交差する古代交通の要衝であり、古代の遺構が田原本町としては比較的濃密に分布する地区である。

今回の調査は、個人住宅の建築に伴って建物予定部分の南側隣接地に東西6.6m、南北1.5mの調査区を設定して実施した。筋道の東側に隣接することから、東側溝が検出できる可能性が考えられていた。

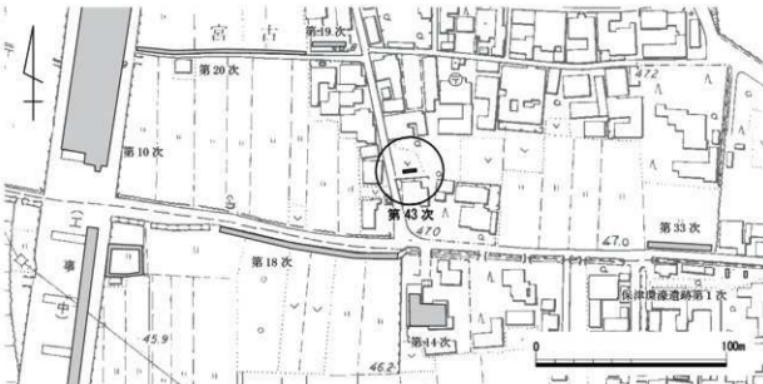
2. 調査の成果

(1) 層序

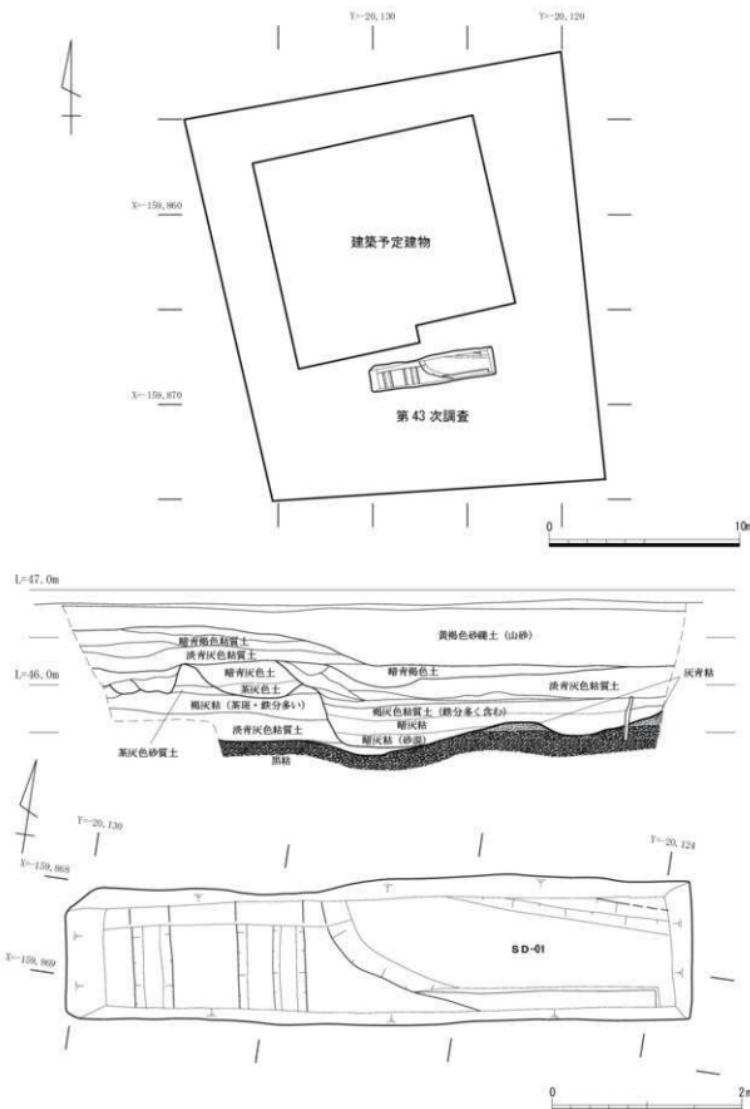
調査地は宅地である。過去の造成により0.2m前後の客土層が形成されていた。なお、調査区東半は近世大溝の部分が一段低かったものとみられ、客土層が0.6mとなっている。ここでは、調査区西半の層序を示す。

I : 暗褐色土〔検出標高46.85m、以下数値のみ記す〕、II : 黄褐色砂礫土〔46.8m〕、III : 暗青褐色粘質土〔46.6m〕、IV : 淡青灰色粘質土〔46.4m〕、V : 茶灰色土〔46.2m〕、VI : 茶灰色砂質土〔46.0m〕、VII : 暗褐色粘土〔45.9m〕、VIII : 淡青灰色粘質土〔45.7m〕、IX : 黒色粘土〔45.4m〕

第I～II層が造成土で、調査区東半では第III～IV層が認められず、第II層の厚さが0.6m前後となっていた。第V層上面が近世～近代の遺構面、第VII層上面が近世の遺構面と考えられる。調査では、第V層上面まで重機で掘削し、以下を人力で調査した。



第25図 調査地位置図 (S = 1/2,500)



第26図 調査区位置図および調査区平面図・断面図（上：S=1/250、下：S=1/50）

(2) 遺構と遺物

近世

SD-01B 調査区全体が東西方向の大溝内であった。深さ0.9m前後を測るが、幅は明らかでない。北壁で層序のみ確認した。遺物には近世陶磁器が含まれることから、18世紀後半以降の遺構であると考えられる。

近代

素掘小溝群 SD-01Bの埋没後に掘削された南北方向の小溝を2条を調査区西半で検出した。SD-01Bの埋没後、一時耕地となっていたものと考えられる。なお、この小溝は後述するSD-01に切られる。

SD-01 推定幅2m前後、深さ0.9m前後の東西方向の大溝である。SD-01Bの東半を再掘削し、調査区中央で北側へ屈曲する。近世末～近代の陶磁器が出土した。また、小形の曲物容器1点が下層から出土した。遺物より、近代を中心に開口していた遺構と考えられる。

3.まとめ

今回の調査では、屋敷地を区画していたと考えられる近世大溝を検出した。近世には東西方向の大溝であったものが、近代にはL字形に屈曲するプランに代わったとみられる。また、遺構の切り合ひ関係から、一時耕地となっていた可能性も考えられる。

なお、今回の調査により筋造道の東側側溝が確認できる可能性を考えていたが、調査区全体が近世大溝内であったため確認することはできなかった。今後の調査により改めて確認を進めていく必要がある。



写真6-1 完掘状況（東から）



写真6-2 完掘状況（西から）

6. 宮古北遺跡 第19次調査

1. 遺跡・既調査の概要

宮古北遺跡は、田原本町のはば中央に位置する、古墳時代前期と古代を中心とする集落遺跡である。第19次調査地の東に位置する第1次調査（保津・宮古遺跡第3次調査）は、ならコープの本体建物の建築工事に伴って実施され、弥生時代の河跡が検出されたほか、古墳時代の居館跡と推定される方形の大溝の一部が検出されている。また、本調査地の南に位置する第9次調査では、北北西-南南東方向の時期不明の溝（SD-101）が検出されているほか、南西に位置する第15次調査では、朱の精製片口鉢が出土した。

第19次調査は、ならコープの敷地内で、防火水槽の設置に伴って実施した。第1次調査で検出された弥生時代の河跡が検出されることが想定された。

2. 調査の成果

(1) 層序

I : アスファルト〔検出標高47.5m、以下数値のみ記す〕、II : クラッシャーラン〔47.3m〕、III : 客土〔47.2m〕、IV : 灰色粗砂〔46.2m〕、V : 青灰褐色粘〔46.2m〕、VI : 灰色粘質土〔45.8m〕、VII : 灰褐色粘質土〔45.7m〕、VIII : 黄褐色粘質土〔45.6m〕、IX : 黄灰色土〔45.5m〕

第I～IV層は、ならコープの敷地内の舗装などに伴う層で、第IX層以下は地山となる。遺構検出は第IX層上面でおこなった。

(2) 遺構と遺物

弥生時代前期

SD-201 幅0.6m、深さ0.6mの溝で、ほぼ北北西-南南東方向に伸びる。断面形は方形で、上端はやや聞く漏斗状である。堆積は大きく2層に分けることができ、上層は黒褐色粘質土、下層はブロック土を含む褐色粘土層であった。

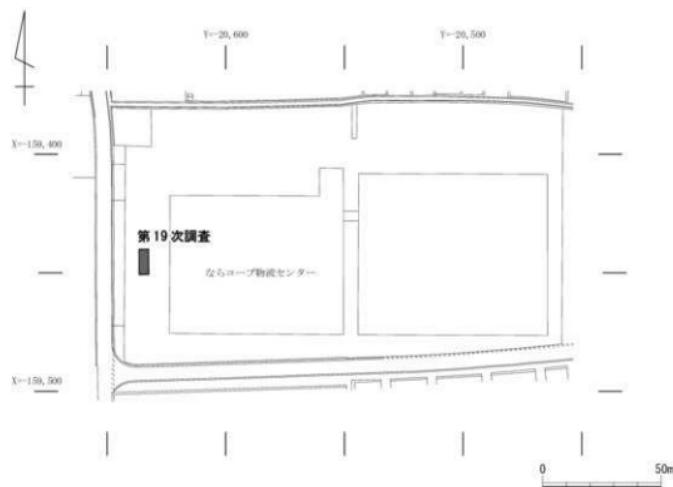
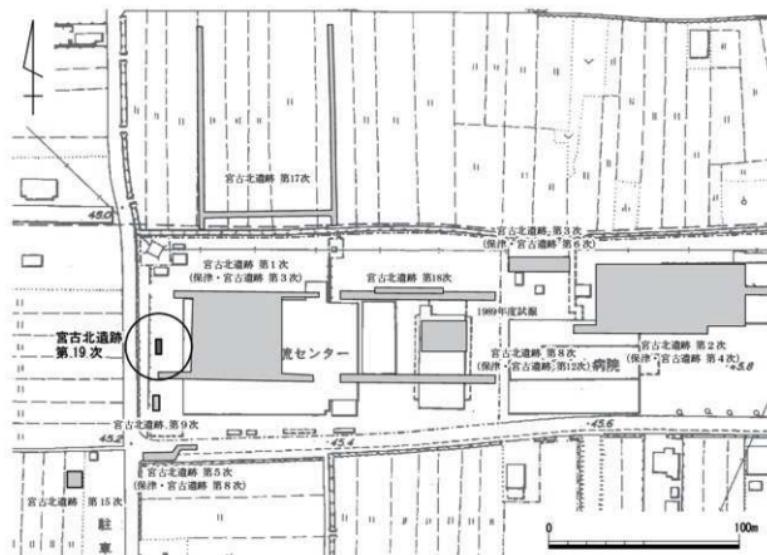
第9次調査で検出されたSD-101も同様の形状である。このことから、第9次調査SD-101と同一の遺構の可能性がある。SD-201の出土遺物は僅少だったが、大和第I-2様式土器の小片が出土していることから、弥生時代前期の遺構と判断できる。

SK-201 調査区南西隅付近で検出した、径2.7m、深さ0.2mの土坑である。遺物の出土はなかったため、時期の特定はできないが、堆積土が黒褐色粘質土で、SD-201と同一であることから、弥生時代前期の遺構であると判断した。

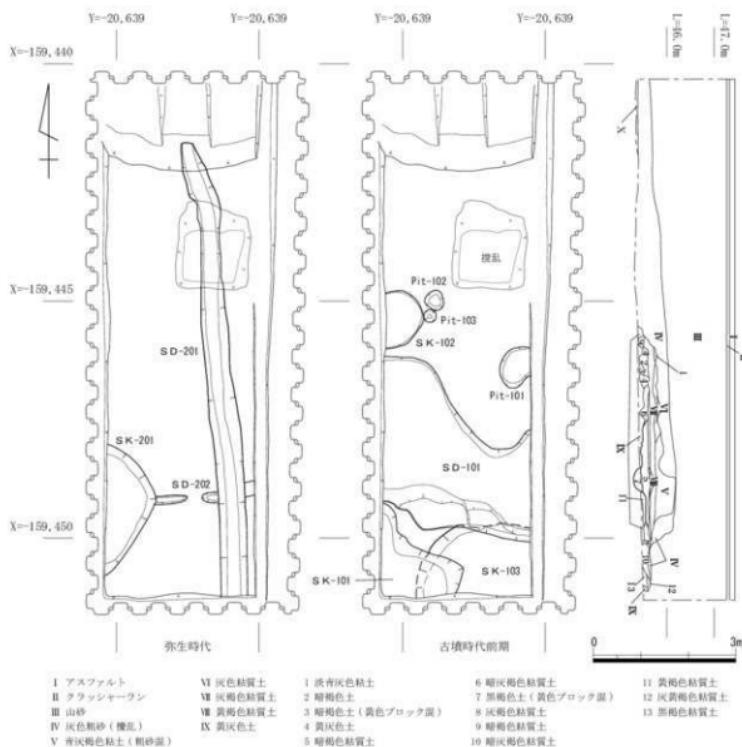
古墳時代前期

SD-101 調査区の南部で検出した、幅2.2m、深さ0.15mの西北西-東南東方向の浅い大溝である。北肩付近から、全体の約1/4が残存した布留2式の甕が出土した（第29図・写真7-1）。

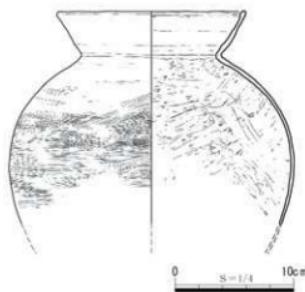
SK-101 調査区の南西隅で検出した土坑である。長軸2.2m、短軸1.2m、深さ0.15mで、遺構の南西半は調査区外である。遺物は、長原式併行の凸帯文土器の胴部凸帯部分片が1片出土しているのみである。庄内～布留1式と考えられるSK-103を切っていることから、この土器片は混入と判断でき、遺構の時期は古墳時代前期頃と推定できる。



第27図 調査地位置図（上：S = 1/2,500、下：S = 1/2,000）



第28図 遺構平面図および東壁断面図 ($S = 1/100$)



第29図 SD-101 出土土器

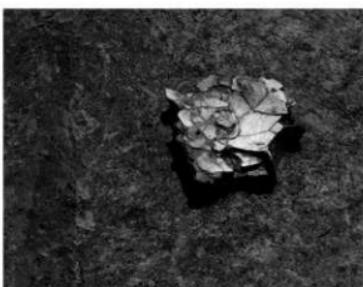
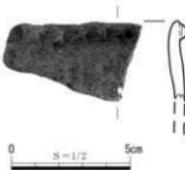


写真7 SP-101 遺物出土状況（西から）

S K - 103 調査区南東隅で検出した土坑である。S D - 101・S K - 101に切られているため、本来の規模は不明だが、長軸2.4m、短軸1.5m、深さ0.3mを検出した。堆積土は暗褐色粘質土である。遺物は、庄内～布留1式の土器が出土したほか、長原式併行の凸帯文深鉢の口縁部片（第30図）が出土している。時期は、遺構の切り合いや出土遺物から、庄内～布留1式と考えられる。



第30図 SK-103 出土深鉢

3.まとめ

第19次調査地は遺物量も少なく、また、遺構密度も低い地点であった。しかし、前述のとおり、東に隣接する第1次調査地点では、古墳時代前期の大溝が検出されており、第19次調査地点は、この大溝の中に位置する。第19次調査で検出された古墳時代前期の遺構が、居館の中でどのような位置づけが可能なのかを検討する必要がある。

また、第19次調査地では第1次調査で検出された弥生時代後期の河跡は検出されなかった。このことから、第1次調査地の河跡は、第19次調査地の北側を流れると推定される。



写真8-1 弥生時代完掘状況（南から）



写真8-2 古墳遺構時代完掘状況（南から）

7. 宮古北遺跡 第20次調査

1. 既調査の概要

第20次調査地は、宮古北遺跡の南端に位置し、道路の拡幅工事に伴って発掘調査を実施した。北に隣接する第13次調査地では、調査区の東側で古墳時代の落ち込みが検出されている。また、南に隣接する十六面・薬王寺遺跡第31次調査では、古墳時代の集落跡や玉造関連資料が検出されており、第20次調査では古墳時代集落の拡がりを確認することが目的のひとつとなった。また、本調査地は保津・阪手道の延長にも該当しており、保津・阪手道の個溝の検出も期待された。

2. 調査の成果

本調査は、道路の拡幅に伴い、擁壁工事が実施される部分に調査区を設定した。ただし、調査地の敷地中央やや南よりの部分で工事車両の進入口を確保するため、調査区は2つとなった。北側を第1トレンチ、南側を第2トレンチと呼称する。

(1) 層序

I : 客土 [検出標高45.3m、以下数値のみ記す]、II : 灰色土 [45.1m]、III : 淡灰褐色粘質土 [44.9m]、IV : 暗褐色土 [44.7m]、V : 灰橙色粘質土 [44.5m]、VI : 黄褐色粘質土 [43.9m]、VII : 緑灰粘 [43.8m]

調査地は水田の堆積（第Ⅱ層：耕土、第Ⅲ層：床土）の上に客土（第Ⅰ層）が盛土されていた。第Ⅵ層以下は地山となる。古代の遺構検出は第Ⅳ層上面でおこなった。



(2) 遺構と遺物

a. 第1トレンチ

古墳時代前期～中期

S R -1102 第1トレンチの南半で検出した北西～南東方向の河跡で、幅5m以上、深さ1.1mである。第34図に示した石製円板および滑石製の白玉が出土しているほか、古墳時代前期～中期の土器も出土している。

古墳時代後期～中世

S R -1101 第1トレンチの北半で検出した、ほぼ南北方向の、蛇行する河跡である。幅は不明だが、深さは0.3mであった。遺物は、古墳時代後期の土器が出土している。

S K -1051・1052 第1トレンチで検出したほぼ方形の土坑で、両者とも約1.9m四方、深さは1.0mである。遺物は僅少であったが、中世の遺構と判断される。堆積土にブロック土が含まれないことから、粘土採掘坑の可能性は低いと考えられる。

b. 第2トレンチ

古墳時代前期～中期

S D -2101 第2トレンチの南端付近で検出した、西北西～東南東方向の溝で、幅1.2m、深さ0.6mである。下層に地山のブロックを含む灰色粘土が堆積していることから、人為的に埋め戻された溝と考えられる。遺物は、布留2式～古墳時代中期の土器が出土している。

S K -2101 第2トレンチの中央部で検出した土坑で、南北軸は2.7m、深さ0.5mである。東半は調査区外となる。出土土器から、布留式期の遺構と考えられる。

S K -2102 第2トレンチ中央部で検出した土坑で、南北軸は1.5mである。東半は調査区外である。出土遺物は僅少であったが、布留式期の遺構と考えられる。

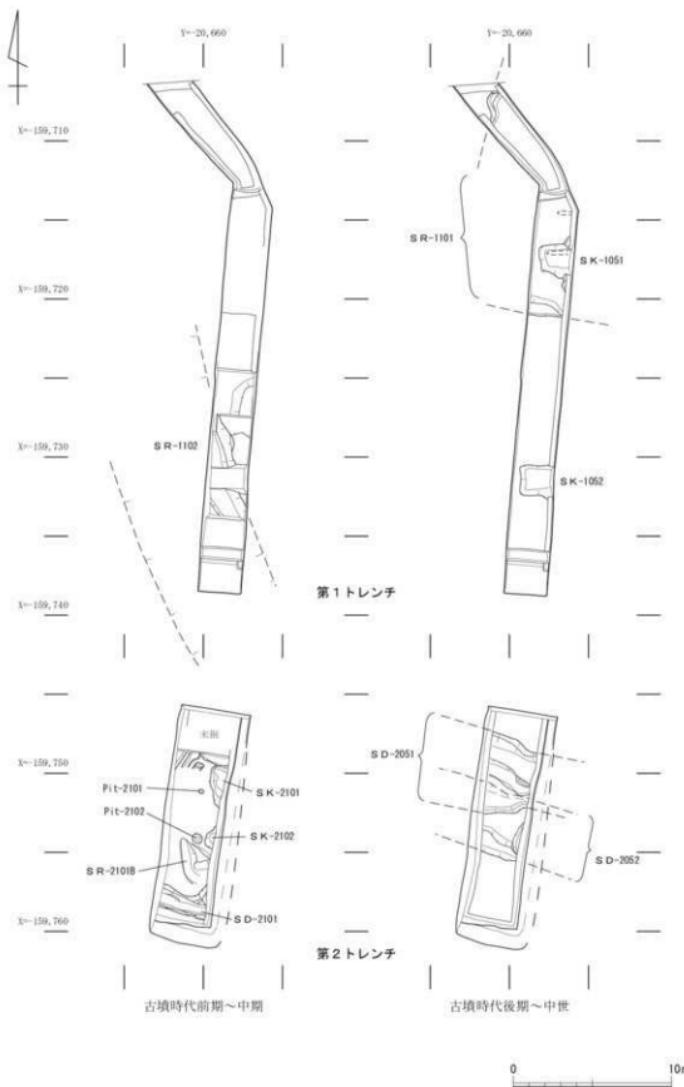
古墳時代後期

S R -2101・2101B 第2トレンチの全体で検出された河跡で、S R -2101Bは下層の凹みの可能性も考えられる。両岸とも検出していなかったため、幅は不明である。古墳時代前期～後期の土器が出土している。

古代～中世

S D -2051 第2トレンチの中央やや北寄りで検出した、幅5m、深さ0.5mの西北西～東南東方向の大溝である。S D -2052の北肩を切る。遺物は、下層遺構からの混在と考えられる古墳時代前期～中期の土器が少量出土したのみであるが、中世より下層の遺構面に掘削されているため、古代の遺構と推測できる。また、写真9-3のように、保津・阪手道の名残とされる道路と軸が沿うことから、保津・阪手道の北側側溝と考えられる。

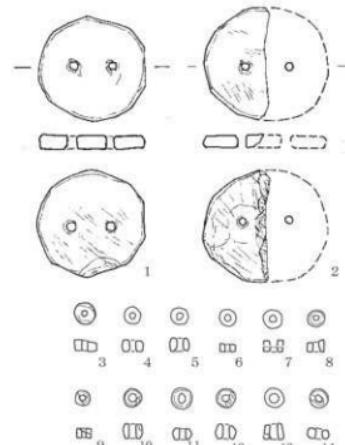
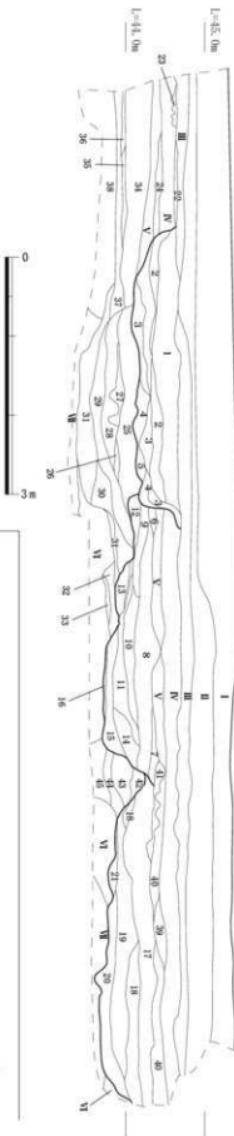
S D -2052 第2トレンチの中央で検出した大溝で、方向・規模はS D -2051とほぼ同じである。S D -2051に北肩を壊されていることから、S D -2052は保津・阪手道の最初期の側溝で、何らかの理由で埋没した後、S D -2051が掘削されたと考えられる。既往の調査成果では、羽子田遺跡第16次調査などで検出された保津・阪手道の側溝も再掘削されていることが明らかになっており、この所見にも合致する。



第32図 調査区平面図 (S = 1/300)

I	灰土
II	灰色土
III	暗灰褐色粘質土
IV	暗褐色土
V	灰褐色粘質土
VI	暗褐色粘質土
VII	暗褐色
	砂
S D-2051	
1	暗褐色粘質土
2	暗褐色粘質土
3	灰褐色粘質土
4	灰白色粘質土
5	灰褐色
S D-2052	
6	暗灰色土
7	灰白色粘質土
8	深灰色粘質土
9	暗灰白色粘砂
10	暗灰白色粘質土
11	淡绿色灰白色
12	暗灰白色粘土
13	暗褐色粘砂
14	灰粘土
15	暗灰色粘砂
16	灰色沙土
22	灰褐色粗砂
23	灰色粗砂
24	灰土
25	砂
26	暗褐色土
27	暗褐色粘質土
28	暗褐色土
29	暗褐色砂质土
30	暗灰色粗砂
31	黑粘土
32	灰色粘質土
33	（褐色）暗褐色土
34	暗褐色土（砂质）
35	灰色粘質土
36	灰白粘土
37	灰粘土
38	暗灰粘土
39	褐色砂
40	淡绿色砂
41	暗褐色砂质土
42	暗褐色砂质土
43	灰褐色砂
44	灰褐色粘質土
45	黑粘土

第33図 第2トレンチ東壁断面図 (S=1/60)



第34図 S R-1102 出土石製品

3.まとめ

宮古北遺跡第20次調査では、古墳時代前期の集落遺構は検出されなかった。よって、十六面・薬王寺遺跡第30次調査地付近が古墳時代前期末集落の北限と考えられる。しかし、S R - 1102から石製品が出土していることからも、生活範囲から大きく逸脱するような地点ではなかったと推定できる。

第2トレーナーで検出したSD-2051・2052は、保津・阪手道の北側側溝としては、本町で最も西の検出例となる。保津・阪手道は、第20次調査地からさらに西に伸び、現在の大字富本を通過していくと想定されているが、その先はどのように続くのか明らかになっていない。今後の調査で保津・阪手道がどのように続くのか明らかにしていく必要がある。



写真9-1 第1トレーナー 中世遺構完掘状況(東から)



写真9-2 第1トレーナー SR-1102 完掘状況(南東から)



写真9-3 第2トレーナー SD-2051・2052 完掘状況(西から)



8. 寺内町遺跡 第16次調査

1. 遺跡・既調査の概要

寺内町遺跡は、奈良盆地の中央、標高49m前後の沖積地に立地する。豊臣秀吉から田原本の地を与えられた平野権平長泰は、自身は領地入りせずに浄土真宗教行寺に寺内町を築かせて領地の振興を図った。しかし、2代長勝が領地の直接經營に乗り出した際に支配権を巡って教行寺と対立し、教行寺は著尾に退転することとなった。教行寺の跡地には浄土真宗淨照寺と平野氏の菩提寺となった本誓寺が置かれた。教行寺の建設した寺内町は北東部に築かれた陣屋の陣屋町として引き継がれ、地域の商工業の中心地として栄えることとなった。

寺内町の南東部には、明治維新時の廃仏毀釈で廃寺となった医王寺があった。この敷地は明治33年（1900）に田原本高等小学校が校舎を新築して移転、昭和7年（1932）に尋常小学校に高等科が併設されたことで廃校となり、校舎は田原本女子技芸学校へ引き継がれた。この学校は田原本高等女学校へと改称されたが、昭和23年（1948）に磯城農業高等学校と統合されるなどして廃校となり、新制中学校へ校舎などが引き継がれた。田原本高等女学校時代の校舎は戦後解体され、新たに体育館施設（第一体育館）が建てられて田原本中学校の生徒などが利用していたが、老朽化が進んだこともあり、現在は廃止施設となっている。

今回、第一体育館の敷地に隣接する町道が狭小であるため、体育館敷地の一部を道路用地として拡幅工事がおこなわれることとなった。側溝部分の掘削が深いことから、敷地東側の南北方向の工区を発掘調査で対応した。なお、敷地南側の東西方向の工区については大正年間に埋め立てられた濠内での工事となり、掘削範囲が大正年間の埋め戻し土内であることから工事立会での対応となつた。また、防火水槽解体工事も並行しておこなわれたが、この部分については近世大溝の断面が確認できたため、工事立会時に断面図の作成をおこなつた（第38図）。

2. 調査の成果

（1）層序

調査地の現状は体育館に附随するアスファルト敷きの駐車場である。調査では、南北45m、幅1mの調査区を設定した。ここでは、調査区北部での基本層序を示す。



色粗砂〔50.45m〕、IV：暗青灰色粘質土〔50.3m〕、V：暗茶灰色土〔50.1m〕、VI：暗茶灰色粘質土〔49.9m〕、VII：褐灰色粘質土〔49.7m〕、VIII：橙灰色粘土〔49.5m〕、IX：暗灰色粘土〔49.4m〕、X：淡橙灰色粘土〔49.3m〕

第Ⅲ層が近代頃の整地層、第Ⅳ・V層が近世頃の造成土、第VI層が中世頃の遺物包含層、第VII層以下が地山とみられる。アスファルト下で煉瓦敷造構を検出したほか、第Ⅲ層上面から掘削される形で戦前の可能性があるコンクリート建物基礎を確認した。また、第Ⅳ層上面で近世頃の造構を、第VI層上面で鎌倉時代頃の造構を、第VII層上面で平安時代後期頃の造構をそれぞれ確認した。

(2) 遺構と遺物

平安時代

小溝群 調査区全体で東西方向の小溝を11条、南北方向の小溝を1条検出した。幅0.3m前後、深さ0.1m前後を測る。耕作に伴う遺構と考えられる。鎌倉時代の遺構SD-51などに切られること、若干の平安時代後期頃の土器片が出土していることから、平安時代の遺構と考えられる。なお、同時期の同様な遺構は50m離れた第8次調査でも確認しているが、南北方向が主であった。

Pit-67 調査区南端で検出した小規模な土坑である。南北0.6m、深さ0.2mを測る。柱穴の可能性がある。平安時代後期頃の土師皿が出土している。

S K-52 調査区南半で検出した土坑である。南北0.6m、深さ0.15mを測る。調査区西側に拡がるため正確な規模は明らかでない。11世紀～12世紀前半頃の瓦器塊等が出土した。

S K-53 調査区南半、SK-52の東側で検出した土坑である。南北1.2m、深さ0.2mを測る。調査区東側に拡がるため性格な規模は明らかでない。12世紀後半頃の瓦器等が出土した。このほか、調査区全体で小規模な土坑を多数検出した。12世紀頃の遺物を伴うが、遺構の性格は明らかでない。

鎌倉時代

S D-51 調査区北側で検出した西北西～東南東方向の大溝である。幅3.5m、深さ0.6mを測る。13世紀前半頃の瓦器塊・土師皿・白磁碗等が出土した。

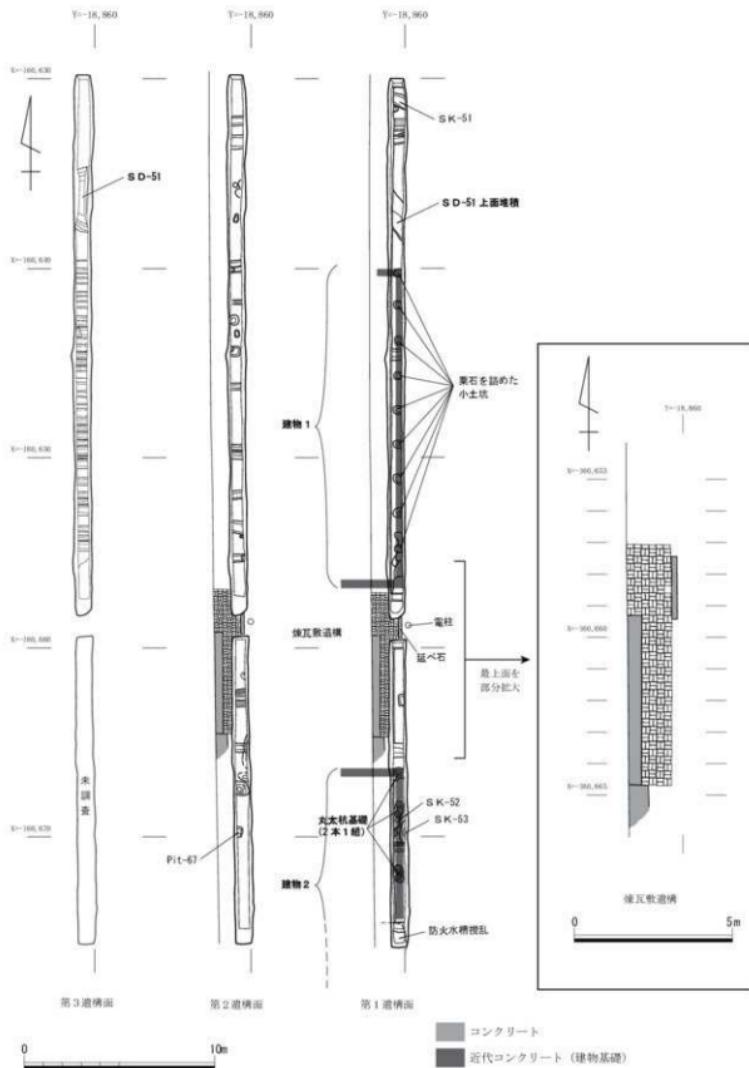
近世

S K-51 調査区北端で検出した土坑状の遺構である。主軸が北西～南東方向の楕円形とみられるが両端は調査区外に拡がる。短軸は0.6m、深さ0.1mを測る。近世陶磁器等の遺物が出土していることから、江戸時代後期の遺構とみられる。

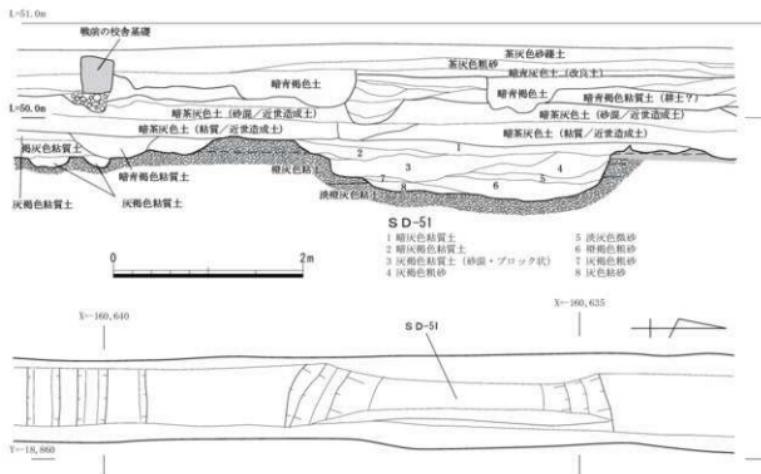
近代

建物1 調査区北半から中央にかけて、直径0.4m前後の土坑に疊が充填された基礎構造物を10基確認した。1.8m間隔で南北16.5mの範囲に分布する。この基礎構造物の上にコンクリート布基礎が載っていた。昭和23年の米軍による航空写真では、東西方向に長い切妻屋根の建物が確認できる。本遺構はこの建物の基礎に相当する可能性が高い。

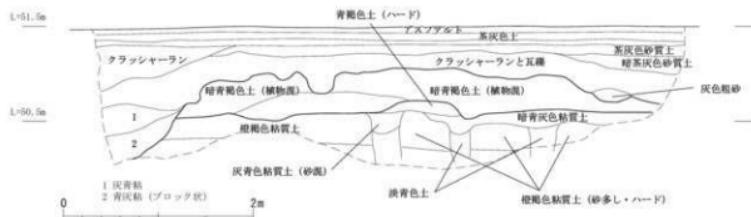
建物2 後述する煉瓦敷造構の南側で建物基礎構造物を3基確認した。直径15cm前後の杭2本を打ち込んで基礎の根固めとしたものである。杭の周囲が青灰色化しており当初は柱穴と認識して掘削をおこなっているが、杭の影響により還元したものを誤認したと考えられる。3基の基礎構造物は2m・3mの間隔で設置されていたが、調査区南端が防火水槽設置工事時に擾乱を受けているため、さらに南に拡がる遺構であった可能性がある。先述の航空写真では、南北方向に長軸をもつ建物が



第36図 造構平面図（第1～3造構面：S = 1/250、煉瓦敷造構：S = 1/150）



第37図 SD-51 平面図および西壁断面図 (S = 1/50)



第38図 寺内町工事立会調査 西壁断面図 (S=1/50)

敷地南東端で確認できる。

煉瓦敷構造 アスファルトの直下で確認した煉瓦敷構造である。建物1の南側に接する南北7.6m、幅1.4m以上の範囲が煉瓦敷となっていた。このうち南側5.4m分は幅0.9mの南北方向通路状になる。昭和23年に廃校となった田原本高等女学校の校舎とそれに伴う煉瓦敷構構と考えられる。

3. まとめ

今回の調査では、平安時代・中世・近世・近代の各時期の遺構を確認することができた。

平安時代後期～鎌倉時代の遺構としては、平安時代末前後的小規模な土坑群、鎌倉時代頃の大溝1条などを検出した。付近で実施した寺内町遺跡第8次調査でも鎌倉時代～室町時代頃の屋敷地間連遺構を確認していることから、楽田寺門前町が本調査地付近にも拡がっていたと考えられる。なお、本調査区の南側で実施した第3次調査や南西隣接地の第2次調査では、中世の顯著な遺構・遺物の拡がりを確認していないことから、本調査地付近が中世集落の南限となる可能性が高い。また、



第39図 出土物



写真10-1 煉瓦敷造構検出状況（南から）

写真10-2 第3造構面完掘状況（北から）



写真10-3 第2造構面Pit 完掘状況（南東から）

写真10-4 第2造構面完掘状況（南から）



写真11-1 工事立会の西壁断面 (東から)

写真11-2 「絵図之添 (依本村小字南新地)」
(左が北、□が調査区推定位置)

写真11-3 田原本高等実科女学校 遠景



写真11-4 田原本高等実科女学校 近景

包含層出土遺物も含め、14~17世紀に属する遺物は殆ど確認できていないことから、本調査区付近では平安時代後期から鎌倉時代にかけて集落城となっていたが、室町時代には田地化していた可能性も考えられる。

今回の調査では、江戸時代と特定できる遺構は僅少であった。近世の学校関連施設による搅乱の影響が大きかったものと考えられる。ただし、本調査の対象となった事業と一連で既存防火水槽撤去工事があり、この工事立会では大正年間に埋められたと伝えられる東西方向の濠を確認することができた。寛政七年三月付の「絵図之添〔依本村小字南新地〕」には今回の調査地付近の様子が詳細に描かれており、調査地付近は医王寺という寺院の境内地であったこと、敷地南端には幅2間半(約4.5m)の濠があったことを知ることができる。工事立会で確認した濠はこの絵図に描かれたもので、地元には大正年間にこの濠が埋め立てられたという話が伝わる。

近代の遺構としては、学校関連の建物跡2棟、煉瓦敷遺構を確認した。昭和23年(1948)に廃校となった田原本高等女学校関連の遺構と考えられる。米軍撮影の航空写真では、東西に長い教室棟とみられる校舎2棟が敷地北半に南北にならび、敷地南東隅には講堂のような長方形の建物がみられる。当時の校舎は切妻状の木造瓦葺き平屋建だったようであるが、この建物の基礎部分と建物間の煉瓦敷部分を検出したのであろう。近代の本町の教育史を考える上で貴重な資料が得られたことになる。

9. 多地区古墳推定地隣接地の発掘調査

1. 遺跡の概要

調査地は、田原本町の南端付近に位置する。近隣には弥生時代～平安時代の遺物散布地である多東新池遺跡のほか、西には多遺跡が所在する。平成27年度は、大字多の東部で下水道工事が実施されたことに伴い、人孔が設置される5ヶ所について発掘調査を実施した。特に、第2トレンチの北北西に古墳1基(II-C-0109)、第4トレンチの東側に古墳1基(II-C-0102)が遺跡地図に登録されており、それらに関する遺構や遺物の検出が想定された。

2. 調査の成果

(1) 層序

ここでは、第4トレンチの層序を代表させて記述する。

I : アスファルト [検出標高54.6m、以下数値のみ記す]、II : クラッシャーラン [54.58m]、III : 青灰色砂質土 [54.5m]、IV : 黄灰褐色土 [54.4m]、V : 橙色粗砂 [54.3m]、VI : 淡青灰色粗砂 [53.7m]、VII : 暗青灰粘 [53.6m]、VIII : 灰褐色砂質土 [53.2m]、IX : 暗褐色土 [53.0m]

第I～VI層は、宅地造成時および道路工事時の盛り土とみられる。遺物は出土していない。第IX層上面で素掘小溝を検出している。

(2) 遺構と遺物

素掘小溝群 第3トレンチで東西方向の、第4・5トレンチで南北方向の素掘小溝を検出した。

これらの遺構は中世のものと考えられる。

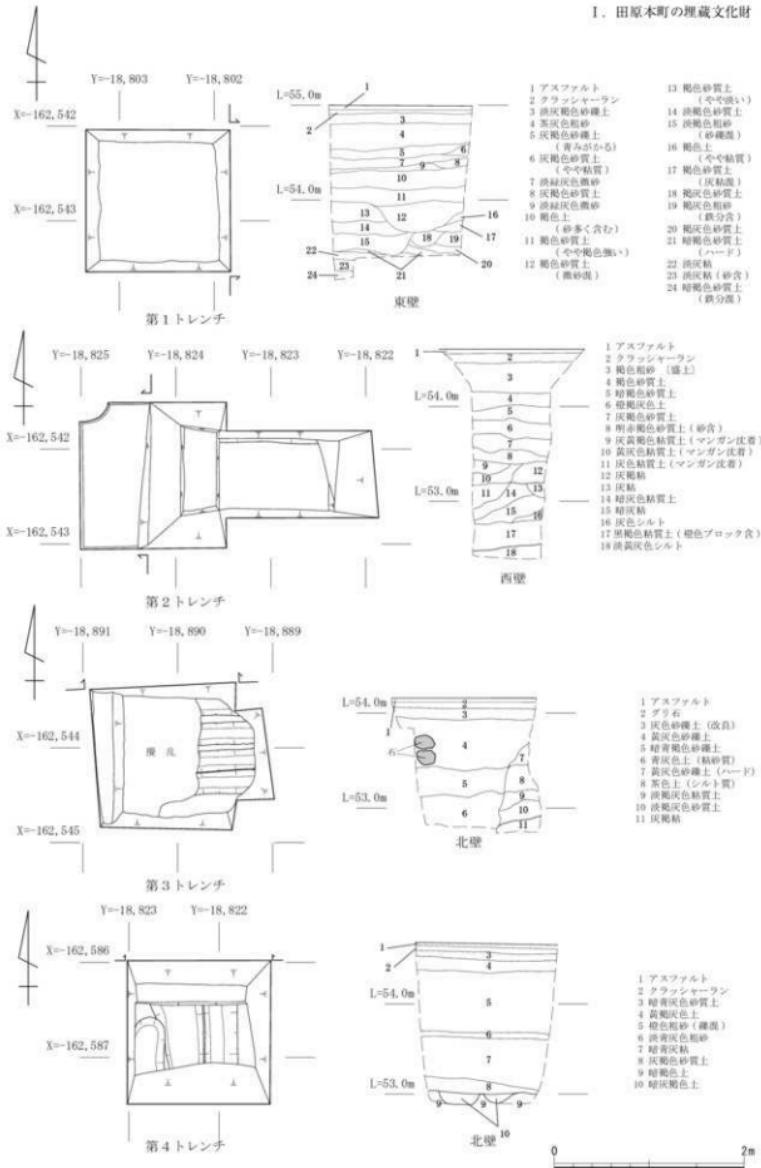
遺物は、須恵器片が數片出土しているものの、古墳の手掛かりとなる遺構・遺物は検出されなかった。

3.まとめ

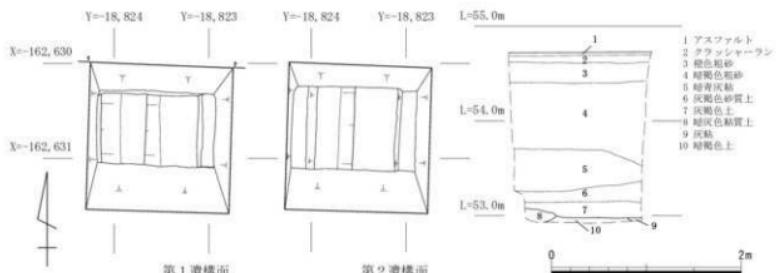
調査の結果、古墳の手掛かりは検出されなかった。しかし、素掘小溝の方向から、中世の地割を推定することができる。特に、第3トレンチ付近では、現状の地割が南北方向だが、中世では異なっていた可能性が高く、大字多周辺の地割を考察する重要な成果といえる。



第40図 調査地位置図 (S = 1/2,500)



第41図 第1～4トレンチ 遺構平面図および断面図 (S = 1/50)



第42図 第5トレンチ 遺構平面図および北壁断面図 ($S = 1/50$)



写真12-1 調査前全景（東から）



写真12-2 第3トレンチ完掘状況（西から）



写真12-3 第4トレンチ完掘状況（南から）



写真12-4 第4トレンチ完掘状況（南から）

10. 三笠遺跡 第1次調査

1. 遺跡の概要

三笠遺跡は、奈良盆地の中央、標高50m前後の沖積地に立地する。三笠集落の西側に所在する農業用溜池「三笠池」の周辺が「周知の埋蔵文化財包蔵地」となっているが、遺跡内容は不明で、今回個人住宅の建築がおこなわれるのに伴い、初めて遺跡名「三笠遺跡」が付与されることとなった。なお、江戸時代まで「下庄村」と呼ばれていた集落が、明治時代に名称を変更して「三笠村」と呼ばれるようになった。村の中心には春日神社と浄教寺があり、浄教寺の本堂に載る鬼瓦は「鶴屋伝兵衛」の銘をもつ。新ノ口村の瓦師鶴屋伝兵衛の手による鬼瓦は旧十市郡域に点在するが、本品もそのうちの1つということになる。

今回、遺跡南東部で個人住宅が建築されるのに伴い、建物北側に東西3.5m、南北2mの調査区を設定して調査をおこなった。

2. 調査の成果

(1) 層序

調査地の現状は宅地である。

I : 暗茶灰色砂礫土〔検出標高50.7m、以下数値のみ記す〕、II : 茶灰色土〔50.4m〕、III : 茶灰色土〔黒灰粘ブロック混〕〔50.1m〕、IV : 暗青灰色粘質土〔50.0m〕、V : 橙褐色土〔ハード〕〔49.7m〕、VI : 灰色粘質土〔砂混〕〔49.55m〕、VII : 暗灰褐色土〔砂混〕〔49.35m〕、VIII : 橙褐色粘質土〔49.2m〕

第I～III層が現代造成土、第IV層は旧水田耕土、第VI層は中世遺物包含層、第VIII層は地山とみられる。中世の遺構は第VII層までを重機で除去して確認した。

(2) 遺構と遺物

中世

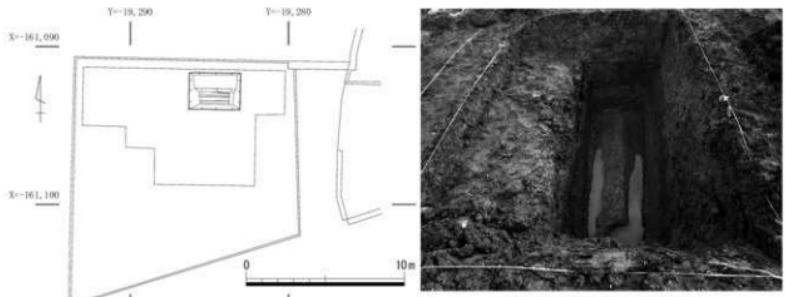
S D - 01・02 東西方方向の小溝2条を検出した。幅0.1m、深さ0.15m前後を測る。遺構に伴う遺物は皆無であるが、遺構検出時にS D - 01の上面から白磁片1点、中世とみられる瓦片1点が出土している。遺物が僅少であるため時期は不明。

3.まとめ

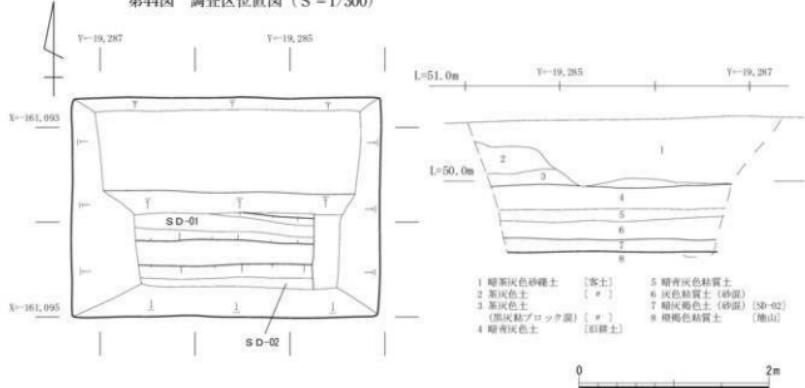
今回の調査では、中世の耕作に伴う小溝以外は顕著な遺構を確認することができなかった。ただし、遺物に中世頃の瓦片が含まれることから、付近に寺院などが存在した可能性が考えられる。なお、本遺跡の南側500mに創建が古代に遡る寺院「秦楽寺」があるが、本遺跡との関係は明らかでない。今後の周辺の調査により秦楽寺周辺地の状況も含めて解明していく必要がある。



第43図 調査位置図 (S = 1/2,500)



第44図 調査区位置図 (S = 1/300)



11. 阪手北遺跡 第7次調査

1. 遺跡・既調査の概要

阪手北遺跡は、標高約50mの沖積地に位置する。道路工事に伴って実施された第3次調査では、奈良時代～鎌倉時代の遺構・遺物が検出されており、墨書き器や石製鉗帶が出土していることから、官衙にかかる遺跡と考えられている。

今回の調査は、第3次調査の北側で宅地造成が計画されたことに伴って実施した。

2. 調査の成果

(1) 層序

I : 暗茶灰色土〔検出標高49.65m、以下数値のみ記す〕、II : 暗灰青粘〔49.6m〕、III : 淡緑灰色粘質土〔49.4m〕、IV : 淡灰褐色粘質土〔49.4m〕、V-a : 暗灰褐色粘質土〔49.2m〕、V-b : 暗灰褐色粘砂〔49.06m〕、VI : 暗灰色砂質土〔48.9m〕、VII : 淡黃灰色シルト〔48.75m〕、VIII : 黒灰粘〔48.6m〕

第I層は水田耕土層、第II層は水田底土層である。第VI層以下は地山となる。素掘小溝の検出は第V-b層上面で、河跡の検出は第VI層上面でおこなった。

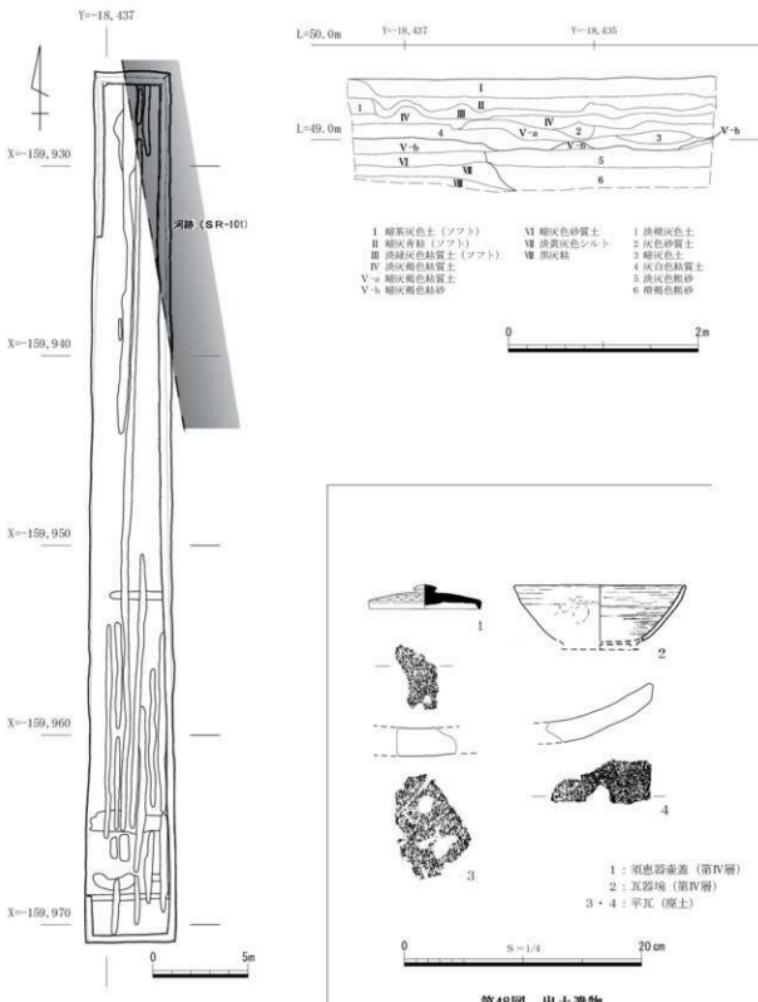
(2) 遺構と遺物

調査区全体で南北方向の素掘小溝群を検出したほか、調査区の北東側では古代のものと推定される河跡（S R-101）を検出した。しかし、本調査地ではこれ以外に古代の遺構は検出されておらず、阪手北遺跡内の古代遺構は、本調査地よりも南側に分布することが判明した。

出土遺物は、第48図に示した。第IV層から須恵器壺蓋（1）、瓦器塊（2）、廃土から平瓦（3・4）が出土した。

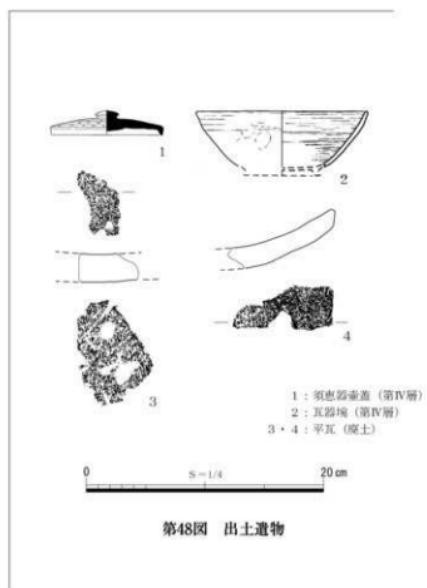


第46図 調査地位置図 (S = 1/2,500)



第47図 調査区平面図および北壁断面図
(平面図: S = 1/250、断面図: S = 1/50)

第48図 出土遺物



3. まとめ

調査の結果、本調査地は、中世は耕作地であったことが判明した。ただし、遺物は少なく、詳細な時期は確定できない。また、古代の遺構は、河跡がその可能性があるのみで、また遺物も僅少であったことから、阪手北遺跡における古代遺構の北限は、第3次調査第1トレーンチ付近と推定できる。



写真14-1 遺構検出状況全景 (南から)



写真14-2 調査区北壁断面 (南から)

12. 唐古・鍵遺跡 試掘調査 (S-201501)

1. 調査の概要

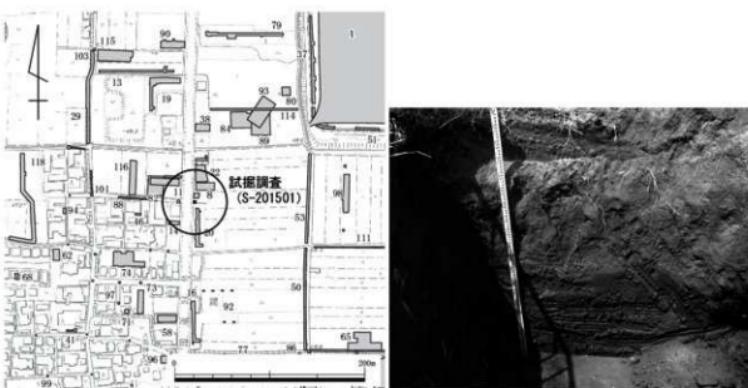
史跡整備工事に伴う下水道人孔設置工事について、遺構への影響を確認するために事前の試掘調査を実施することとなった。掘削範囲は、東西2m、南北1.8m、深さ21m。

2. 調査の成果

山砂が厚さ1m、暗茶灰色土の造成土が厚さ0.55m、旧水田耕土・床上層が0.45m。以下に中世遺物包含層の可能性がある暗褐色土が括がる。掘削範囲内では弥生時代の遺物包含層まで達しないことを確認した。

3. まとめ

調査の結果、工事による掘削は弥生時代の遺物包含層までおよばないことを確認した。ただし、狭小な面積で上層の山砂が崩落しやすい状態であったため、簡単な層序確認程度しかできなかった。なお、施工時の立会でも弥生時代遺物包含層まで掘削がおよばないことを確認した。



第49図 調査地位置図 (S = 1/5,000)

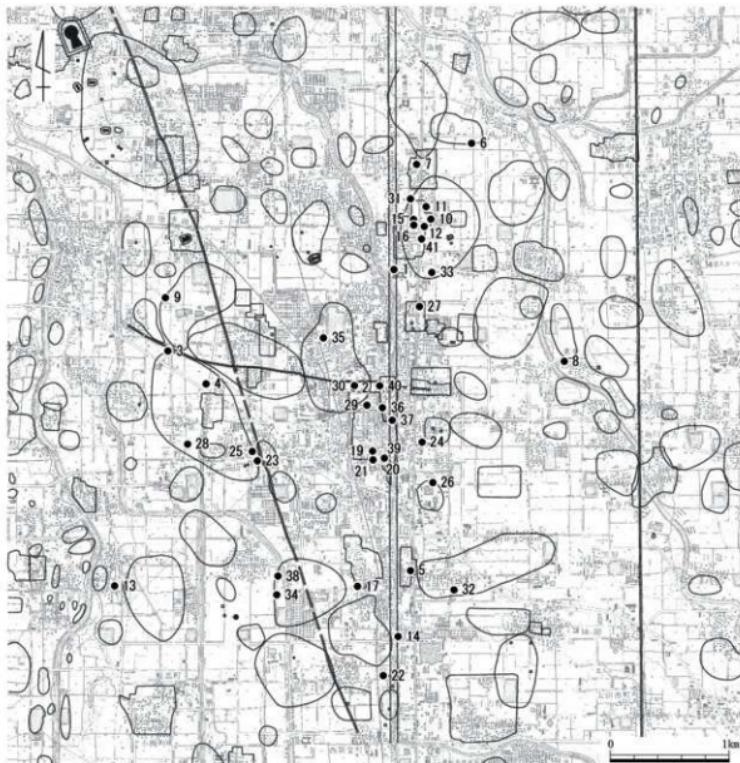
写真15 北壁断面（南から）

(2) 工事立会の概要

2015年度に実施した工事立会は41件である（第7表）。史跡整備事業に伴う唐古・鍵遺跡の工事立会が1件、公共上下水道工事に伴う工事立会が4件、その他公共事業に伴う工事立会が11件、個人住宅建築等に関わる工事立会が11件、民間開発に伴う工事立会が14件である。

対象となった遺跡は、唐古・鍵遺跡が多く、次いで十六面・薬王寺遺跡、寺内町遺跡、平野氏陣屋跡と続く。唐古・鍵遺跡は史跡公園の整備や史跡の維持管理等の公共事業による比率が高い。対して十六面・薬王寺遺跡、寺内町遺跡、平野氏陣屋跡は個人住宅の建築によるものが多くなる。

また、遺物散布地としていた大字佐味での工事立会により、中世頃の溝を確認した。昨年度から継続しておこなっている当該地域の工事立会の成果（後述）から、「佐味垣内遺跡」として新規登録をおこなった。



第50図 田原本町の遺跡と工事立会地点 (S = 1/40,000)

第7表 2015年度 工事立会一覽

調査名	調査地	調査者	工事の目的	立会者	調査日	内容
1 下フ道 (R-201501)	田原本町大字鍵子下調査 107番1	個人	個人住宅の建築	清水	2015. 4. 7	柱状改良時に公道、路堤の為状況不明。構 造物、植物不明。
2 鍵子田 (R-201502)	田原本町大字鍵田内 379番1	難竹村工務店	分譲住宅の建築	清水	2015. 4. 9	柱状改良時に公道、路堤の為状況不明。瓦 屋根1点が立ち、倒壊不能。
3 十六面・薬王寺 (R-201603)	田原本町大字十六面 小字下坂10番1・北側河川	田原本町 (建設課)	植生工事	清水	2015. 4. 22	河岸段丘部分に公道と接続。大通が過去の河川 改修工事による現状を受け、道幅が狭く生存 していないこれら。
4 十六面・薬王寺 (R-201604)	田原本町大字保津 小字瀬295番1	個人	合意所および薬局の 建築	清水	2015. 4. 24	平成26年度の年間の総額。左側は樹齢時に公 道、右側は既成土塁から1.5mほどまで斜 面の土塁の上位にまで築てる。運搬・植物不 明。
5 日光寺推定地 (R-201605)	田原本町大字千代 小字千代11番12番1	個人	コンビニエンス ストアの新築工事	清水	2015. 5. 8	ペタ基底および排水管部の掘削時に立会。 最大で4.0~5.0mの深さであり、造成土内に 倒壊する。運搬・植物不明。
6 八畠 (R-201506)	田原本町大字八畠 小字マグロ10番1	御幸トウ （プロダクト）	青空駐車場の造成	清水	2015. 5. 27	樹齢3基底付近に立会。SL-9.3m前後の掘 削で、土盤下・土床上に掘る。運搬・ 植物不明。
7 湧吉氏仮説地推定地 (R-201507)	田原本町大字湧吉 小字細内337番10	西中和尚事	解体工事	栗田	2015. 6. 17	樹物削除時に立会。最大で4.0~5.0m程度の 削除がされた。倒壊部にあつた。
8 東井上 (R-201508)	田原本町大字東井上 小字イゴイ48番1 北側道路外	田原本町 (下水道課)	下水道工事	清水 斐田	2015. 6. 23 +11. 4	試験掘削に立会。SL-1.5mの掘削。SL-9.7~ 10.0mは過去の埋管管の復元。その後の下 方には水成層地盤となりる褐色粘土層。11月は 人孔開設時に立会。SL-1.5m前後の掘削 で、土盤下に土木工事の成し土が並ぶが これが、過去10年で土木工事の成し土が並ぶ が、運搬なし。
9 宮古北 (R-201509)	田原本町大字東原 小字馬場13番1・14番1	個人	青空駐車場の造成	西岡	2015. 6. 30	造成工事時に立会。雨水田面からSL-0.6~6 m程度の掘削をさせよう。掘削を伴わず、 地下道路への影響なし。
10 唐吉・鍵 (R-201510)	田原本町大字唐吉 小字ナツ田121番1	田原本町 (総合政策課)	コスモスの栽培	清水	2015. 7. 13 +18	造成工事での起耕作業。地下道路への影響 なし。
11 唐吉・鍵 (R-201511)	田原本町大字湧吉 小字ナツ田109番1	田原本町 (総合政策課)	史跡維持管理	清水	2015. 7. 16	安政時代築城工事に伴う排水溝跡に上が り入り込み、水没田地旧こなみのためか。 既存耕作地の排水口の直ぐのみであり、掘削は 地下道路までではない。
12 唐吉・鍵 (R-201512)	田原本町大字湧吉 小字上原110番外	田原本町 (総合政策課)	史跡公園整備ほか	清水 斐田	2015. 7. 22 ~2016. 1. 22	史跡地西部の水路建設工事および橋脚 撤去、西側の防災防護工事、道幅の下 方には水成層地盤となりる褐色粘土層。 大でSL-3.0~3.5m程度の掘削で、土壤腐殖層 の除去工事では竹の籠を除さないための 人孔開設時に立会。SL-1.5m前後の掘削 で、土盤下に土木工事の成し土が並ぶこと が、過去10年で土木工事の成し土が並ぶ が、運搬なし。
13 運動散歩地 (長野県内) (R-201513)	田原本町大字佐味 小字アツマヤ48番2 北側道路	田原本町 (下水道課)	下水道工事	清水	2015. 7. 21 ~2016. 1. 22	人孔開設時に立会。SL-1.5m前後の掘削を伴 せず、土盤下に土木工事の成し土が並ぶ が、過去10年で土木工事の成し土が並ぶこと が、運搬なし。
14 下フ道 (R-201514)	田原本町大字千代 小字下坂25番6	個人	個人住宅の建築	清水	2015. 7. 31	予後2年程経過あり、立会時の工事は既に終 了してペタ基礎工事であります。
15 唐吉・鍵 唐吉氏仮説地 推定地 (R-201515)	田原本町大字湧吉 小字ナツマツ45番1外	栗I・T・O	青空資材販売の造成	清水	2015. 8. 21 +24	地上土を撒き取工事等に立会。過去の造成 工事の上位SL-0.6m後方の取扱りをりより、日本 農業省の規制により、運搬・置換・不適切。
16 唐吉・鍵 唐吉南尾辺野原 推定地 (R-201516)	田原本町大字鍵子小字細内 311番1	個人	宅地分譲および 下水管設	清水 斐田 西岡	2015.10.15 ~11.11	上下式下水管埋設による地盤地動時に立 会。唐吉・鍵第16回復元調査地にて進 捗する。SL-0.6~0.8mの大量土石が出土。 第16次洗削工事終了後は、土盤下に土 木工事等が並ぶ。運搬工事は後手まで 土木工事等が並ぶ。運搬工事は後手まで 土木工事等が並ぶ。
17 麟友寺 (R-201517)	田原本町大字蘿生 小字蘿生内 300番1・300番2	個人	障がい福祉サービス 施設の建築	清水	2015.10.26	ボーリング調査地およびペタ基礎工事時に 立会。運搬・置換・運搬なし。
18 尾内町 (R-201518)	田原本町小字大門町 60番1号	個人	施設改修・個人住宅 の建築	清水	2015.11. 4 +2016. 1. 12	廃壁改修工事時に立会。2.0m以上の造成工 事上からSL-0.6m程度の掘削。地下道路への影響 なし。
19 幸田 (R-201519)	田原本町大字平田 小字大坂1472番1号	㈱ゆかりの里農	福祉施設の建設	清水	2015. 11. 5	農業改良工事時に立会。2.0m以上の造成工 事上からSL-0.6m程度の掘削。地下道路への影響 なし。

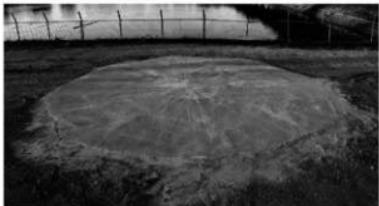


写真16- 1 高角射砲台座

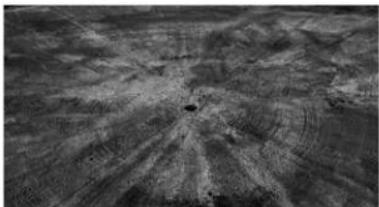


写真16- 2 台座中央の旋回痕

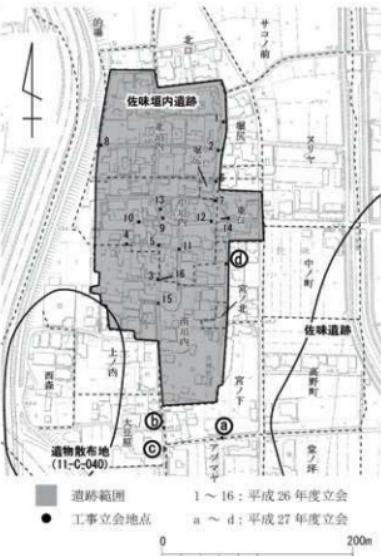
工事名	調査地	調査者	工事の目的	立会者	調査日	内 容
20 寺内町 (R-201520)	田原本町小字丸木橋36番5	田原本町 (建設課)	道路工事(既存防火水槽の撤去)	清水 柴田	2015.11. 6 ～12. 14	防火水槽の撤去工事をねお上げ(防護柵・本路工事等)に立会。幅員約3.0mの掘削。内側から五輪鉄・土頭瓦等が出土。近代大礫とみられる遺物を検出。
21 寺内町 (R-201521)	田原本町小字大門町35番11	個人	自転車駐車場の建築	柴田	2015.11. 9	布基礎工事時に立会。G.L. -4.4mまでの掘削で、遺物なし。地盤調査から北側水路の推測とみられる落石を確認。
22 多治川古墳推定地 (R-201522)	田原本町大字多治川古墳外約345歩北側道路外約356番・352番	田原本町 (下水道課)	下水道工事	清水 柴田	2015.11. 17 ～12. 1	人見段設の检测時および人見段設時に立会。設置深度12.6m-2.0mをこえるが、G.L. -2.2m～L. 1.0m地盤上に到達した。遺構・遺物不明。
23 十六面・薬王寺 (R-201523)	田原本町大字薬王寺小字大5番5	個人	個人住宅の建築	清水 柴田	2015.11. 20 ～2016. 1. 12	掩埋工事時に立会。柱大径0.6mの掘削。柱頭を確認するが遺物なし。後日柱頭改め立会時に立会。遺構・遺物不明。
24 脇手仁天前 (R-201524)	田原本町大字阪手小字朝ヶ坪66番1 東側水路	田原本町 (建設課)	規制打水路	清水 柴田	2015.11. 24	掩埋工事時に立会。柱頭を確認するが遺物なし。後日柱頭改め立会時に立会。遺構・遺物不明。
25 十六面・薬王寺 (R-201525)	田原本町大字薬王寺小字東口68番2・69番6	個人	個人住宅の建築	西岡	2015.11. 30	柱状改良工事時に立会。遺構・遺物不明。
26 脇手 (R-201526)	田原本町大字阪手小字字ノ町90番65	個人	個人住宅の建築	西岡	2015.12. 2	掩埋工事時に立会。届出で約2.0mの掘削上から1.5mの掘削があったが、過去の改良工事歴がなかった為、1.0m程度の掘削。最大G.L.-1.3m程度であり、造成工事にて積み重なされたコンクリートで被覆されていたとみられる。遺構・遺物なし。
27 小坂里中 (R-201527)	田原本町大字小坂里小字北浦84番1	㈱トランクス ボーダー	事務所の建設	柴田	2015.12. 11	布基礎工事時に立会。掘削約2.0m-0.3mまでで、盤上に留まる。遺構・遺物なし。
28 十六面・薬王寺 遺物散布地 (R-201528)	田原本町大字十六面小字城持306番 西側水路外	田原本町 (建設課)	道路整備工事	清水	2015.12. 14	着手工事終了した為立会。コンクリート基礎が完築していた為、詳細な状況は不明。掘削はほぼ中世遺物会発見される範囲に留まるとみられるが、一部で古墳時代または地山とみられる深度まで発掘がおこなっていた。頭蓋など遺構・遺物はみられない。
29 寺内町 (R-201529)	田原本町小字田中345番	個人	個人住宅の建築	清水	2015.12. 21	鋼管杭打ち工事時に立会。遺構不明。近代的な陶磁器片多数。地下水漏れへの影響は最小限とみられる。
30 羽子田 (R-201530)	田原本町小字羽子田内379番9	個人	個人住宅の建築	清水	2015.12. 21	基礎工事者とその後の立会。ベタ基礎が形成しており、遺構・遺物不明。地下への影響は少ないとみられる。
31 唐古・鎌 (R-201531)	田原本町大字唐古小字東平171番1・T2番1号	田原本町 (まちづくり整備室)	交流促進施設の建設	清水	2016. 1. 12	表層のすき放り工事時に立会。G.L.-0.2m程度の掘削であり、地下構造への影響は不明。遺物なし。

調査名	調査地	原因者	工事の目的	立会者	調査日	内容
33 佐吉・堺 (K-201533)	田原本町大字堺小字北野戸137番1	㈱ティーズ コーポレーション	青空駐車場の造成	西岡	2016. 1. 16	縫隙立ち上げ工事を確認した為立会。基礎工事が完了し、堅固な状況で上げ工事中であったため、縫隙の状況は不明。Gd-0.3mの範囲であり、水田未土内までに留まるところである。
34 矢部南 (K-201534)	田原本町大字矢部 小字鹿鳴敷361番1 東側本道	田原本町 (建設課)	水路工事	清水	2016. 1. 27	水路掘削時に立会。水頭面から-0.2~ -0.25 mの範囲で、既設水路の側壁による縫隙内に留まるとみられる。遺構・遺物なし。
35 美子田 (K-201535)	田原本町大字八尾 小字西道538番2	個人	個人住宅の建築	清水	2016. 2. 1	基礎建物工事に立会。Gd-0.3mの範囲で、造成土内に留まる。遺構・遺物不明。
36 平野氏跡屋跡 (K-201536)	田原本町小字奥畠内 756番2	個人	個人住宅の建築	清水	2016. 2. 4	柱状改良工事に立会。Gd-0.1mの範囲6本と、Gd-0.3mの範囲、屋式の為状況不明。遺構・遺物不明。
37 平野氏跡屋跡 下ノ道 (K-201537)	田原本町小字二輪町 465番1 東側道路	田原本町 (建設課)	道路改修工事	清水	2016. 2. 4	掘削工事を確認した為立会。Gd-1.5mの範囲であるが、瓦片が打たれていた為詳細は不明。堤防面上から1mの範囲であり、地下遺構への影響は少ないところである。
38 宮森 (K-201538)	田原本町大字天保 小字笠ノ木560番2外 南側里道	田原本町 (建設課)	道路工事	清水	2016. 2. 9 + 23	Gd-0.4~0.7mの範囲。遺物包含層は確認できず。遺構・遺物なし。
39 平野氏跡屋跡 (K-201539)	田原本町小字奥畠内 756番8	パナホーム㈱	共同住宅の建設	清水	2016. 2. 10 + 13	柱状改良工事に立会。Gd-0.4mの範囲8本と、Gd-0.3mの範囲、屋式の為状況不明。遺構・遺物不明。
40 平野氏跡屋跡 (K-201540)	田原本町小字カジヤ内 889番3	大光建設㈱	分譲住宅の建築	西岡	2016. 3. 7	工事者は後に遺構があり立会。基礎工事は完了し、種植物を建設であった為、地下の状況は不明。発掘幅はGd-0.4mまでの範囲であり、出土内に留まる設計であることから、遺構には達しないであろうとみられる。
41 佐吉・堺 (K-201541)	田原本町大字堺小字堺内 301番1 北側里道	個人	野戸の築設	柴田	2016. 3. 15	大型車が里道を走行中、埋設していた野戸戸を踏み抜いた為、埋め戻しの際立会。立会時点すでに埋め戻しが完了していた。

R-201513 佐味垣内遺跡 工事立会

平成26年度から27年度にかけて、大字佐味での下水道工事が実施された。周知の遺跡外での工事ではあったが、平成26年度の工事立会により中世遺構を確認した。平成27年度の工事は遺跡範囲の南側が中心で、遺跡の南限を確定することができた。立会地点a～cは全体が粗砂堆積であり、河道内と考えられる。なお、遺跡東部に位置するdでは、南北方向の溝1条を確認した。溝幅・深さともに不明であるが、堆積土から中世頃の遺構とみられる。

本年度までの工事立会の成果および小字名から中世遺跡が存在しているとし、平成28年4月20日に遺跡の異動届を奈良県教育委員会に提出し、5月31日に「佐味垣内遺跡」として新規登録した。



第52図 佐味垣内遺跡の範囲と工事立会地点 (S = 1/5,000)